
遠野より麦の霧雨

すみなり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠野より麦の霧雨

【Nコード】

N0701A

【作者名】

すみなり

【あらすじ】

部屋を灯すと女の子が隅で座っていた。涼しくてほろ暗い少女とその父かもしれない私。二人が一緒にしようとした真綿のような日々。

Le prologue

永らくご無沙汰しておりました。覚えておいででしょうか、雪灯りと呼んでいた女にございます。突然の連絡、心より深くお詫び申し上げます。さぞ御戸惑いの事と思います。勿論あなた様と同じにこちらも二度と連絡するつもりはなく、一時の想い出より期待多く考えることなど決してございませんでした。その筈が学浅いばかりに、あなた様に頼る以外の道に思い当たりませんでした。この手紙を持たせたのは、私とあなたの娘です。まさかとは思いましたが、それ以外には考えられないのです。不躰ですが、しばしの間、娘を奉公させていたたく、娘をやりました。名はメイ、と申します。詳しく記す暇なく、口足らずで申し訳なくも、どうか、短い間預かって下さればと思います。心静かなあなたに押し付ける様な形となり、口惜しい程申し訳なく思います。もしご承知いただけない時は、お手数をお掛けしますが月のない夜に澄んだ水気を散らし、人気のない木々の下に行かせていただければと思います。どちらにせよご面倒おかけしますがどうぞよろしくお願い致します。

部屋のドアを開け、荷物と食べ物が入ったビニール袋とレンタルビデオの袋を下ろした。そして明かりを点けようと伸ばした手元に、白くゆらりとこの手紙が落ちてきたのだった。

しばらく暗闇の中を靴も脱がずに立ち竦んでいた。その言葉は私を深い回想へと押し込んだ。寒い夜。鼻の触れる距離。白い女性の顔。薄く暗く靄のかかった脳裏で反芻した。雪あかりの女。耳が熱を持った。そう呼んだらう過去の自分に、私は照れるような気持ちになった。そして、意識が頭の底から上がり戻ると、口が動いた。

「娘…。私の？」自分の声を耳にした瞬間、私は冷ややかな感覚を捉え、目線を奥へとやった。暗闇の溜まる部屋隅で何かが動いた。消墨色の世界を舞う黄色い目のウサギ、が大きく描かれた浴衣か

着物がが見え、その肩に横がかかる髪型の顔がぼんやりと見えた。
小さな女の子が立っていた。

「君は」

娘をやりました。

「メイ、さん：？」少女が小さく頷いた。

「君が：お母さんから私のところに預けられに来た……私の、むすめ……なのか？」

少女の顎がもう一度うなずかれた。「よろしくお願いします」

何も分かってないのに私の顎が一度、上下した。蒸す様な熱気が体を覆い、私の頭の中で渦をまいた。

忘れていた足の感触を確かめるように数歩進んだ。そして右手を左右に振り伸ばし、電灯の紐を探した。この状況をもう少し現実に繋げるために。

白い光が点灯し、部屋に広がった。飲み込むような小さな悲鳴が聞こえた。薄めた目を開くと、確かに目の先には少女がいた。少女は眼を覆っていてその黒い髪が小さく揺れた。そのまま少女はうずくまり、顔を下にして崩れ落ちた。

私はしばらくそのまま立って眺めていた。そして、訳の分からぬまま素早く電気紐を引っ張った。

視界が闇に包まれた。

ようやく周囲の輪郭が見え始めても少女は動かなかった。

私はとりあえず寝室へと向かい、敷いたままだった布団を整えた。そして少女をそっと持ち上げ、寝室へと運び入れた。少女の軽い体と麻生地の乾いた手触りだけが現実的だった。布団に寝かせ、薄いタオルケットを一枚被せた。額に手をやると、小さな水たまりと感じれるほど汗が出ていた。着替えさせたほうがいいだろう。私は半ばけのままコンビニに行き、男性用の肌着を三枚セットで買ってきた。

肌着はすぐに沢山の汗を含み、私がコーヒーを飲み一風呂浴びた頃には二枚目の肌着に着替えさせた。脱がせた肌着を洗濯機に放り

こみ、コーヒーを入れた。

煙草を一本吸い終わり、コーヒーを持って寝室へと入った。落ちていたか、と近寄ってみると少女の荒い息が聞こえる。汗のひかない体に触れるとさつきよりも骨の感触が強くなっていた。痩せていた。私は困った汗をかき、とりあえずはだけていたタオルケットを被せ直した。すると聞こえる呼吸は次第に肩でするようになり、仕舞いには不規則にかすれたものになってきた。「あつい…」そう呟いたので、私は慌ててタオルケットを取り上げた。少女は目を瞑ったまま、海面に上がったように大きく息を吐いた。それでも汗は止まらないし苦しそうだつたのでクーラーをつけてみた。すると、どうしようか思案しているうちに少女の寝息は落ち着きをもつていった。

そして今。リモコンの表示は二十度だった。季節はとても暑い終夏、私は押し入れから引つ張り出してきたカーディガンを羽織っている。そして贅沢の甲斐あってか、少女の寝息は細いが規則的なものとなった。

少し、いいだろうか。私は和紙を被せた小さな間接照明の電源を入れた。灯った明かりに一瞬だけ少女のまぶたが動いたが、光を柔らかくしたためか、さほど辛そうでもなかった。

5歳、くらいだろうか。幼い。顔全体の印象は薄く、長くない睫毛が髪と同じく淡く青みを含んだ黒で濃く目に留まる。表情に薄く灰色が差しているが、逆にそれは小さな輪郭の中で整頓された顔に独特の、宵に浮かぶ舟の様な雰囲気を作り出していた。

…似てる。彼女の面影が間違いなくこの子にあった。少女の口が小さく呻いた。その平和な仕草に私の目元が僅かに力をぬいた。そして小さな額に手を当ててみた。手の甲にそよぐ髪の毛の感触があり、そして、懐かし過ぎる心地が手の平に触れた。

この涼しさを感じたのは、あの夜は、五年以上前のことだったということだろうか。あまり、覚えてない。やはり…私の子なのだろうか。どうやって確かめればいいのか。認知した覚えもないが、

どうすればいいのだろう。

：奉公させてと言われてもな。

寝不足の頭がぐるぐると回り、こめかみに力が入る。煙草に火をつけ、乾いた唇から煙をはいた。ん、と呻く声が聞こえた。寝苦しいのかと彼女の顔を注意深く覗き見ると、微かに言葉が聞き取れた。おっかあ、おっとう。

そう呟いていた。

頭の回転が穏やかになった。そして胸中の一点が熱を帯び、唇が僅かに締められた。

まあ：明日、考えればいいか。煙草を消し、布団の隣に毛布を敷いた。その上に横になり、私は目を閉じた。

外に置いとけ、って言われてもな。

「申し訳ございません：はい。いえ、大丈夫です。月曜は出ます。ご迷惑をお掛けします。はい、ありがとうございます。では失礼します」

電話を置き、私はテーブルに座り直した。

「じゃあ、メイ：さん。まず苗字を教えてもらえるかな」

一間、静寂を置いて少女の首が左右に二回ふられた。「わかりません」

私は鼻で大きく息を吸い、お茶を一口飲んだ。「あ、じゃあ、お母さんの名前は？」

少女は手を後ろへとまわした。そしてピッという電子音と共に、冷たい風が私達を扇いだ。

少女は両手を膝に、仰々しくお辞儀をした。「ごめんなさい」

「うん」私は頬を掻いた。「別にこっそりクーラーを使わなくていいんだ」

少女は背後からエアコンのリモコンを取り出し、丁寧に両手で差し出した。

私は受け取ったりモコンを少女に返した。「遠慮しないで、使えばいい。それよりお母さんの名前、教えられないのか？」少女が一回、頷いた。

娘を預ける夫に妻が名前を教えないなんて、自他共に結婚はしてないが、とにかく都合の良いおかしな話だ。まあ、あの日も手紙でも教えてくれなかったし、何故かそこまで興味も湧かない。私の気持ちでは諦めのような納得ができていた。

だが、それ以前にこの子が私の娘と決まった訳ではない。預かる前からないは別として、これから動く上で現状を理解する必要があると思うのだ。私は、この子が昔一夜関係を持った女から送られてきたこと。そしてこの子の名前？がメイであるということしか分かっていないのだ。

「じゃあ、住所は？」

「住所って何」

うん、と私は眉をしかめた。そして「お母さんと、どこに住んどの？ってこと」と聞き直した。すると少女の顔に初めての明かりが灯った。私の顔にも明かりが灯った。「分かるか」

「山奥！」少女は元気よく答えた。

私はテーブルに両肘を乗せ、向かいのイスの上に正座する少女に言った。「麦茶飲むか？」

「うん！」良かった。麦茶は気に入ってくれた様子だ。やっぱり子供は元気が一番だ。

朝起きたらまだ洗濯してない着物か浴衣を着ていて、昨日一回着させて脱がせた肌着で床そうじをしていて、エアコンの温度は十八度だった。私の体温は三十八度を超えているかもしれない。はは、若いな。

幼さを少し恋しく想い、私は麦茶を入れたコップに氷を四つ入れた。「ちょっと失礼」そう私はトイレに行った。戻ってくるとメイが床にうずくまっていた。

「おい、大丈夫か」床で呻くメイに聞いた。「冷たくて硬い」テ

ーブルの上の麦茶には水がなくなっていた。どうやら飲み込んでしまったようだ。

そりゃそうだと私は困ってしまった。とりあえず喋れるということとは呼吸ができないというわけではないだろう。私はメイの背に手をやり、大丈夫か大丈夫か、と阿呆のようにさすり続けた。

「もう、大丈夫、です」そう言って、また肌着で床を拭き始めた。

私はメイを背後から両手で持ち上げた。きやつ、と両手両足をばたつかせるメイに「そんな気を使うことはないんだ、座っていないさい」と言って脇に下ろした。すごく軽い。

解放されたメイは早々と部屋の隅まで這い、正座した。初めて会った時もそうだったが、この子にとって部屋の隅は安心な場所のようだ。気持ちは分からないでもないが、明るくない部屋の中（電気は夜オレンジ灯しか点けない、蛍光灯はメイが眩しそうにするから）こつちを向いて体育座りをされる方はあまり落ち着けない。

子供ってというのはこんなにも手間が掛かるものなのか。私は全国の母親に光明を感じる想いだった。

「ほら、その着物も脱ぎなさい。この前買ってきて、まだ雑巾にされてない肌着が一枚残っている。これを羽織りなさい。それはきれいにしような」

男性用肌着をもって近づくと、メイは両手で自身を抱きしめ、首を振った。私は変態か、と少し哀しい心持ちになった。

私は台所の換気扇に向かい、煙草に火を点けた。

これではいかん。現状維持に精一杯で状況把握もままにならない。まあ、幸い金のかかる趣味もないため、生活費くらいはなんとかなるだろうが、とにかく、日常環境を整えなければ…。心に余裕の持てる日常があつてこそ、が私の持論だ。

よし。煙草を消し、風邪薬を栄養ドリンクで飲み込んだ。

私はメイの前にしゃがみ「買い物に行こうか」と言った。メイの口元が引き締められた。

「君が着るもの。君が着たい服を買いにいかうか」メイはまだ少し

訝しげだったが、少し開けた口と見開かれた両目が買い物に連れて行く意義を感じさせた。「麦茶飲むか」

「うん」

「よし。入れよう」私は台所へと向かった。

明日は休日だ。とりあえず今日はこれで大丈夫。考え過ぎるのは毒だ。しゃがみ込み麦茶のパックを取り出した。重い頭をうつむかせることを止め、私は勢いをつけて立ちあがり、天井に顔を向けた。突然視界が揺れ、足の力が抜けた。ん。白くぶれた視界が焦点を取り戻すと、メイが近くで私を心配するように眺めていた。「大丈夫ですか」

「ん」私は立ちあがり目の前、から一步離れて見上げるメイに「うん、大丈夫だ」と言った。

「ちょっと横にならせてもらうよ」そう言って私は寝室に向かった。毛布の上に横になり、布団も、とりあえずもう一組買ったほうがいいか、などとぐったり考えた。

「麦茶飲む？」いつの間にか傍にいたメイがそう言った。

「…うん。ありがとう」いい子じゃないか。台所へ向かう少女の足音を聞いているうちに私の意識は床に吸いこまれていった。

さあ、デパートに行くぞ。

と、風邪の余韻により喉の痛む声で、外へのドアを開けた。まだ十時にも関わらず、外は日光が眩しく、やっぱりもう少し遅くにすれば良かったか、と思わせる暑さがあった。メイは暗い室内に差し込む柔らかな明かりを浴びると、半目の両眼を瞑り、外からの爽やかな空気をたぐるように右手のタオルケットを引きずりながら、そのそとドアまで歩んできた。そしてそのままドアを出た所で崩れ落ちた。

「うお」慌てて固い床に倒れるのを阻止し、部屋のベッドに戻した。一時間後。

五杯目の麦茶を飲み終わると、メイは立ち上がりドアの方を向い

て、顔を強張らせた。ドアを睨む視線と、低く落とした腰と、少しずつ前へと進むスリ足が、私はデパートに行く、という強硬姿勢なのだと解釈できた。そういえば、メイは眩しいのが苦手だった。部屋をほろ暗くしているのに慣れてしまつて、つい忘れていた。ならば夏の日光の眩しさなど大きな脅威だろう。あと、暑いのも苦手か。私は押入れに向かい中を漁った。何か彼女を助けてくれる道具はないものか。明日から私は仕事に行く。決心が焦りと緊張を生んだ。・・・ハンチングが出てきた。が、浴衣に洋風鳥射ち帽子など私には抵抗があつた。今ふと、メイのその消炭色の浴衣と青みを含む黒髪を基とする一つの抽象。その調和の中心をずらしたくない思いが少なからず私にはあるのかも知れない、と感じた。サングラスも出てきたが、どちらにせよ暑さは塞げない。うん、と考え始めたところで好い物を玄関に見付けた。

「よし、デパートに行くぞ」ノブを握り、私はメイと自分に意志確認をした。

「はい」私の一メートル後ろで、メイは厚みのある領きを返した。覚悟のような決心が確かにあるようだ。

「開けるぞ」私はメイと自分にそう告げ、外へとドアを開いた。爽やかな空気と射すような日差しと押し込まれるような暑さが私を順番に襲った。「よし」

そういつて私は右手を天に上げた。そしてその手に握られたものの一部を左手で勢いよく押し上げた。

黒く小さく、傘が円状に開かれた。すると私を中心とする空間には、部屋には劣るものの、涼しさとほろ暗さが生まれた。「悪くない。来てみなさい」

メイはゆつくりと黒いビニール傘の下へと入った。私はメイを見た。メイは私と傘を見上げそして「悪くない。です」と言った。

「よし、じゃあ今度こそ、出発だ」傘をメイに持たせ、私とメイは出発した。

階段を降りるとき、私のすぐ後ろで追う様に鳴る足音が、私とメ

イを木陰のような現実感で覆った。

私の気持ち少し引き締まり、私達はデパートへ向かい歩を進めた。十五分も経たないうちに、中間地点の駅に着く頃には、メイがぼててしまった。肩が上下し息はか細く荒く、前に垂らした両手の袖が地面に着いてしまいそうだ。そうなるだろう、と出発後すぐに日傘を私が持ったのだが、考えが甘かったようだ。それとも、ビニール傘に遮光効果を求めるのが元々の間違いだったのだろうか。時刻は十一時三十分とちょっと。急ぐことはない。「喫茶店にでも入ろう」「まだ大丈夫です」きっぱり、でもかすれ声でそう言ったメイに私は失笑し近くのちよつと裏にある喫茶を定め、中に入った。

「いらっしやいませえ」

べっこう色の長い髪の若い店員がしとやかに私達のテーブルについた。軽く会釈を返した私に向かって視線を返し「ご注文はお決まりですか」と言った。「エスプレッソと：メイ、さんは決まったか」

メイは先程と変わらず呪うようにメニューを睨み込んでいた。私は店員に聞いた。「麦茶はありますか」「えー。麦茶は、ないんです。ごめんなさい」とメイの様子を申し訳なさそうに見て「ウーロン茶ならあるんですけど。これがこの店で、一番麦茶に近いと思います」

「メイさん、ウーロン茶でいいか」　メイは小さくはいつ、と大きく相槌を打った。疲れた目を細めている。「じゃあウーロン茶をお願いします」メイの様子を嬉しそうに眺めている店員に言った。「かしこまりました、それではごゆっくりなさって下さい」そう言つてウェイトレスは下がっていった。カウンターでは店主らしき男がこちらに目を向けていた。昼時なのに他に客はおじいさんとおばあさんの一組だけだった。ウェイトレスもさっきの若い女の子しかない。だからこの店に入ったわけだが。そして私達の間に会話がなかった。

「そういえば、メイ、さんの歳は幾つなんだ」

メイは指を四つまで折った。「六つ」　小学一年生か。ランドセルを背負うメイ、を思い浮かべたところでさっきの高校生ぐらいに

見えるウエイトレスが飲み物を運んできた。「お待たせしました」

「ありがとう。ほらメイさんも飲もう、まだデパートまで半分程度だ」神妙な顔つきでうなづいたメイは両手でウーロン茶を受け取りストローに口をつけた。

「娘さんなんですか」

店員が目を大きく開いた笑顔で私の返答を待っていた。

「…みえませんかね」

店員の顔が強張った。「あ、いえ。…さん付けしてたのが面白くて、お気を悪くしたのならごめんなさい」そう言って店員は頭を下げた。

「いや、やっぱり変かな。どうも敬語が口に染みついてしまっていて…。よく堅苦しいと言われる」頭を掻いて私は焦りを散らした。「いえっ、大変素敵だと思います」微妙な誉め言葉を述べて店員は「ウーロン茶おいしい？」とメイに聞いた。メイは眉毛の上がらない笑顔で「おいしい。です」と店員に答えた。すると店員は最初の笑顔で「ほんと？良かったあ」と言った。

「ちよっとトイレに行ってくる」エスプレッソが空になり、ウーロン茶が半分になり、私は席を立った。

手洗いの鏡に映る自分は、自宅以外でトイレを利用したとき見る自分の顔とさほど変わり無かった。さっきは少し動揺してしまった。親戚の子を、と答えそうになった。そして途端にメイの立場が頭に浮かび、強張った声が出してしまった。さん付けは周囲から見たら不審か。六歳児にいい大人が敬語なものな。警察を呼ばれないだけ良かったと喜ぶべきだろうか。

親戚の子を預かっているのです。

はい。私の娘です。

メイにとってどっちが嬉しい。…。だが、「親戚の子」なんて言うのはメイの孤立感を煽るだけのように思えた。洗った手を拭き、席へと戻った。メイが長いストローの挿してあるペットボトルを両手に持っていた。ラベルには「祖母の麦茶」と書いてある。「それ

どうしたんだ」席につき、聞いた。メイは「あの御姉さんがくれ、ます」とペットボトルを手にしたまま、体と両手の小指でさっきの若いウエイトレスを向き指した。いや、私はいらない…、とつい呟いたところでウエイトレスがこっちに気づき、手を振った。私は小さく会釈を返し、メイは両手のペットボトルをくるくると回転させていた。

「飲まないのか」

私がそう言うと「飲みます」とメイは眉と口の緊張を緩め、ストローに口をつけて音もなく吸った。ウーロン茶だけグラスごとテーブルからなくなっていた。苦いのかな。

「ありがとうございますー」会計を終え私は「麦茶どうもありがとう」とペットボトル代を断ったウエイトレスに言った。「ああ、いえーそんなあー。なんでもないです」と彼女は若々しく笑った。実はエスプレッソのカップの下に二百円を置いてある。私の方が一枚上手だ。

それはともかくと彼女を見ると、最初はパンチ強く見えたべっこう色の髪の毛が今は遠慮がちに背中を下ろしてあるように見え、なんとなく名札に書いてある「黒木えり」とあいまって彼女がうらかに見えた。

「ご馳走様でした」「ごちそうさまでした」お辞儀をするウエイトレスが閉まるドアに隠され、私達の眼前には日差しが照る街中が現れた。

「よし、じゃあ頑張るぞメイ」

「はい！」黒い傘は少し頼もしく開き、メイと私はまたデパートを目指した。

浴衣を三着。あと下着と靴下。と黒に青の斜線が一本入った日傘。布団。つっかけ（木製サンダル）を買った。結構な出費に財布を撫でながら、私は各階案内のプレートを見た。「ほら、メイさん。上に行くぞ」周囲に好奇心一杯なメイを呼び、私たちは七階へと向

かった。エスカレーターから頭を乗り出し下を覗くメイを制しながら、おもちゃ売り場へと辿りついた。「さてと」メイが私を見上げた。売り場には沢山の子供が売り物のロボットやらゲームやら人形やらを手に取り、大いにはしゃぎ尽くしていた。クーラーがよく効いている。

普段、というか明日からは私も日中は仕事に行くつもりだ。その間、メイが暇を潰すなにかを買う必要があると思うのだ。「ほら、何か欲しいものを探して来なさい」正直、どんなものが彼女の遊び心に火をつけるのかさっぱり見当もつかない。メイの様子を観察し決めることにする。子供がひしめき、七色の音飛び交う売り場の様子に戸惑っているのか、少し恐る恐るな表情と足取りでメイは奥へと進んだ。その右手前方にまず、TVゲームに興ずる男の子がいた。硬くコントローラーを握り込み、真剣な面持ちの少年にメイは足を止めた。そしてその位置から怪訝そうにTVを覗き込んだ。

TVゲームか、悪くないかもしれない。私はそう思った。これなら長い時間を掛けて楽しんでくれそうだ。逆に人形とかロボットだと二・三日振り回していれば足か腕か、はたまた首が折れて飽きてしまいそうだ。ちょっと違うか？

だが、私の関心も虚しく、メイは奥へと歩を進めた。どうやらピョンと来なかったようだ。おもちゃ、というよりも売り場の様子を伺うようにメイはゆっくりと周囲に顔を動かしながら歩いていた。時間がかかりそうだった。喫茶店でコーヒーと煙草で一服したい気持ちを抑えつつ、私は近くの椅子に腰掛けた。

ぼう、としていた。

「お父さん。これ買って」父親におもちゃをねだる息子がいた。両手に大小様々な買い物袋を下げた父親は「我慢なさい」と億劫そうに言った。

そして気付いたらメイの姿が見えなくなっていた。立ち上がり、売り場の奥まで行って見たが見当たらない。デパートのどこかの隅で蹲り体育座りをするメイの様子が想像された。

しまった。七階を一通り歩いてみてもメイの姿は見えなかった。息の荒いグルグル眼鏡の男がメイを飴玉で誘う様子が浮かび、私は足を速めた。そうだ、放送を使おう。早足でエスカレーターへと戻るとおもちゃ売り場前でしゃがむメイを発見した。入り口にいたのか。ほっ、と溜息をついてメイに近づくと、彼女の目線が強く前方のTVに向けられていることに気付いた。私はメイの隣にしゃがみ込み、TVに注目した。子供向けのアニメだ。メイは間近に顔を遣っていた私に気付き、両目を見開いた。なかなか熱中していたようだ。

「これ欲しいか？」そう言うときメイは眉端をハの字にし、唇を波線にうにうにと結んだ。

私は立ち上がり「これ下さい」と店員を呼んだ。

はぁーい。と店員が駆け寄ってきて「良かったね」とメイに言った。

「うん！」と笑みのにじむ顔で彼女はそう答えた。その笑顔にうんうん、と感無量な私に向けて「二万九千八百円になります」そう店員が告げた。

「もう駄目」そう言って太郎くんは倒れた。「諦めちゃ駄目！」

そう言ってアンフィは太郎くんを揺さぶった。半死の人間を揺さぶるとは……。顔を歪める私の横でメイは駄目え、と床につけた両手をぐいぐい押し込んだ。「実は僕、^{アンフィ}Anfiちゃんのこと……」がふつ、太郎くんは肺を抑えなくなる様な咳をして「もう駄目だ」ともう一度言った。「太郎くん！」Anfiの叫びがこえました。

ああっ、とメイは床をばんばん叩いた。下にも住んでいる人がな……と言いたいが、メイはおとなし過ぎるので咎めるのも躊躇われる。そして太郎くんの遺言も中途半端に「見付かりましたぞー」突如、白髪で細身の老紳士が宙を舞って現れた。「Sebastien！（セバスチャン！）」Anfiはリアクションの取り辛い名前を叫ぶと老紳士の投げた、フライパンほどもある黄金色のエーデルワイスの花を受け取り、「これで作れるわ！ありがとうSebastien！（セバスチャン！）」と言った。展開に理解の追いつかない

私の横でメイの興奮は鼻息荒く床への振動も最高潮へと達していた。止めてくれと念じる私の心境とは裏腹に、T? 画面ではテンションの高いメロディが鳴り響き、その中心でAnfiはどこに携帯していたのか先が細長い花瓶のようになっていて私の背丈程の黒い杖を手にし、先の空洞に銀色の粉とエーデルワイスの花の一片を入れた。そして自分ごと回転しながら「ナムアミアーメンバラモン」と言った。

今度は神仏混同か、と私が耳を疑うと「太郎くんが元気になりますように」Anfiは杖先の中に息を吹き込んだ。そしてそれを逆さにすると銀の粉がパラパラとAnfiの手の平に積もった。「さっ、早くそれを太郎殿に」セバスチャンSebastienの声は相手にされず、Anfiは静かに粉を一滴み太郎くんの口に押し込んだ。

十秒後、太郎くんの目が開き、そして礼を言った。アンフィAnfiは友情を語り、セバスチャンSebastienは何か述べて物語を締めた。

テンションの低いエンディングロールを見つめながら、太郎の中途半端な告白による今後の二人の関係への亀裂と、忘れられているだろう残ったフライパンほどもある一片欠けたエーデルワイスの花の運命とを皮肉に心配する私をよそに、メイは満足気に麦茶をゴックンと飲み干した。「楽しかったか」「うん!」そうじゃなきゃ困る。笑顔でそう思った。シリーズ物だからセットで買ったとはいえ、三万近くもするとは・・・まあ、これで当分の間は、日中は仕事をこなし、夜に今後の対応をじっくりと考えることができるだろう。明日はいよいよ仕事だ。まだ風邪による肉体と、あと心の疲れが少し残っているが、そんな愚痴は許されない。目線を落とすと、床に置かれたアニメビデオが目に入った。「Secret・Anfirシークレット・アンフィルミール」直訳すると、秘密の看護婦。なんともいがかわしい看護婦だ。題名が気になって辞書まで使ってしまった。子供にとって知らない言葉の意味なんて存在しないのだろうか。散らばったビデオテープとケースを戻したところで、視線に引っ掛かったビデオがあった。

「看護婦、犯す」

固まった私を心配そうにメイが見つめた。「なんでもないよ」

アダルトビデオ延滞の恥、そしてメイが目撃・鑑賞していた場合の影響、その二つが灰黒い濁流となり私を深い気疲れへと飲み込んでいった。

L e n u m e r o 2 (前書き)

アダルトビデオの延滞料金は320円。

L e n u m e r o 2

最寄り駅を出ると、夜の商店街が目の前に見えた。仕事の帰り道、久しい風景を歩いた。これを繰り返すのが、今の私の日常。日の下で精一杯働き、日が沈めば、のんびりする。世間を寝かせ、好きな事に思いを馳せて、自分を重ねていく。そんな毎日が好きだ。昨日までの一日中ドタバタな生活も今考えれば新鮮だったが、やはり私自身を進めていく時間は大切にしたい。メイを預かるのは短い間だと手紙には書いてあった。とりあえず今日帰ってメイの様子を見て、また生活の調子を整えよう。どうせ短い間だ。今はそれでよしとしよう。暗の訪れている商店街を抜け、家への一本道を歩く。先の右手に明るく灯るコンビニエンスストアが見えた。何か買

っていくと喜ぶだろうか。麦茶に合いそうな饅頭でも買おうか。そんな自分の様子に、失笑した。照れ隠しに空を見上げると、大きく雲のかかった三日月が遠くに見えた。

メイは今日を無事に過ごしただろうか。出るとき置いておいた朝食のパンは食べてくれただろうか。昼食に冷蔵庫のそばと桃を食べてくれただろうか。歯磨きはしただろうか。寂しがっていないだろうか。つい外出したりしてないだろうか。さらっと変なお兄さんに手を引かれたりしてないだろうか。それでうっかり軟禁されたりしていないだろうか。

真っ直ぐ帰ろう。そんな訳はないのに、私は早歩きで家を目指した。

階段を忙しくのぼり、静かに自分の部屋に辿り着き鍵を開けた。

…部屋は真っ暗で、何も見えなかった。私は体半分を玄関にいれ、部屋にメイの姿を探した。「メイ…さん」返ってくるのは静寂だけだった。目が慣れてくると私はドアを閉め、オレンジ灯を点ける紐を探した。紐を掴むより早く、ズボンの裾が引かれた。足を蹴り上げるそうになるのを制し、後ろを振り返った。メイだった。私は前

にしゃがみ込み、見えない表情に語りかけた。「…心配したよ。大丈夫だったか」メイは顔を上げようとし、また伏せた。

寝かせておいてあげよう。そんな安直な朝の私の想いにより、メイの一日は不安に支配されたものになってしまっていたのだろうか。息が触れる程近くも、触れずに固まるメイの頭が私をそう後悔させた。

私は俯いたメイの頭に手を置いた。メイの肩が一瞬震え止まって、私達はしばらくそのままでいた。

そして、「オレンジ灯を点けよう。それで麦茶でもいれるよ」と私は立ち上がった。するとメイは部屋の隅に走り、布団にもぐりこんだ。

それを見た私は掴んだスイッチ紐から手を放すと、風呂に入り、歯を磨き、麦茶を飲んでから隣に布団を敷き、寝に入った。「ごめん」暗闇にそう言って目を閉じた。

沈むような眠りを頭にした頃、右腕がひんやりと圧された。力を入れそうになり、留まった。その感触は小さな手が私の腕を掴んでいるものだと思ついた。

ごめんなさい。

小さな囁きが聞こえたように思う。

私は目を開け、瞼と同じ暗闇を見つめた。何故謝る。

朝、起きると私はいなかった。メイ。メイにとって、誰もいない寝起きは心細いものだったのだろうか。部屋の隅でうずくまり家族かも知からない私の姿を求めてくれていたのだろうか。揺さぶって起こしても一言声を掛けていくべきだったのだろうか。起きている時は見せなかった、歳相応の無垢な安らぎで眠るメイを。

右腕を掴むひんやりとした小さな感触が、私を後悔の懸念から脱させた。

私は目を閉じた。

そして決して右手の感触が離されぬよう、身動きしない、とやがて訪れるだろう睡魔に誓った。

朝八時。コーヒーが沸いたところで私はメイの枕元に向かった。
「メイ、起きてくれ」

メイをタオルケットの上から静かに揺さぶると、暗の籠ったまぶたが開き、青墨色に瞳が私を向いた。

「おはよう」

「おはよう、ございます」くぐもった声でそう返しながら、メイは布団からのそのそ起き上がった。

メイが私の前に立ったところで「おはよう」私は再度そう言った。怪訝そうに、「……おはよう」でもメイはそう繰り返した。「よし、ご飯にしよう」

私はメイに背中を向け、テーブルに調理済みの朝ご飯を並べた。

「君に頼みがあるんだ」パンを口一杯に頬張ったメイに私はそう切り出した。動きを止めたメイに「すまない、それ飲み込んでからでいいよ」と私は言った。

麦茶を使い結構な頑張りようでパンを飲みこんだメイは椅子に深く座りなおし、床に届かず揺らしていた足を前に揃えた。もう椅子に正座はしない。一問待ち、私は口を開いた。

「メイ。私は私達が暮らしていくにはご飯や服や家や、もちろん麦茶も必要だと思う」メイの目は呆けていたが、私は構わず続けた。

「それらを手に入れたり維持したりするのにはお金が必要だ。麦茶を飲ませてあげたいし、私は毎朝毎夜コーヒーを飲みたい」けだるい様子を引きずりながらも、メイはうん、うん、と肯いた。

「お金を得るために私は七日の内五日間の日中、昨日と同じように仕事に出ようと思うんだ」

メイの顔に不安な曇りが伺えた。昨日の夜の感触がよぎり、胸奥が冷えた。

「昨日は黙って出て行って悪かった」私は頭を下げた。「だから今日は言ってから出ようと思う」

「だから、メイには9時から5時まで一人で家でお留守番していて

欲しいんだ」結局、今日もそれを繰り返すような自分に頭の奥が熱を持った。

頭の上で、あ、という声が聞こえ私は頭をあげた。メイは両手をテーブルにのせ、小さな体を乗り出していた。「わたしは…おつかあに、あなたの生活やお仕事を邪魔しないように、と約束しました。だから、いいの。昨日は…ごめんなさい」メイはただ私に向いていた。たぶん頭にクーラーの風がそよいでいて、胸に本能を殺すような氷が当てられた、そんな優しくも無情で、少し危うい涼しさだった。「ありがとう」昨日までの私達の情景が遠く離れたなかで私は、また謝らせてしまったか、と何故か微笑みまじりに考えた。

「じゃあ行ってくるよ、メイ」ドアを半分開け、見送りに立っ
てくれているメイに言った。

「行っ
てらっしゃい、ませ」少し微笑ながらも目元に陰が差している。朝早く起きて疲れているのだろうか。

「うん、あ、あともう一つお願いが…」メイは目を少し広げて私を見た。私は頭を掻いて「できれば…敬語は使わないで欲しい。私は、メイにはもっと迷惑を掛けてもらった方が嬉しいよ」と言った。は…うん、とゆっくりきこちなく、メイは一回うなずいた。私もうなづいた。「じゃあ、行っ
てきます」

「行っ
てらっしゃい」お辞儀をしたメイに背中を向け、あ、私が敬語使ってしまった、と思いつながら私は家を出た。照る日差しをなんとなく懐かしみながら私は仕事に向かった。

そして日が沈んだ。仕事を終え、私はコンビニエンスストアで麦茶に合いそうな饅頭を買い、家路についた。

そしてドアの鍵を開け、なんとなくゆっくりと扉を開けて、いつものように暗い自分の家に上がった。

いや、オレンジ灯はつけてもいいんじゃないか。真っ暗な部屋に上がり、紐を探り当てオレンジ灯をつけた。メイがいない。私は部屋を見渡してから寝室に入った。

ベッドのタオルケットを広げて、空いているトイレのドアを開け、湯の張ってない浴槽を覗いて、収納の襖を開けてみた。

そして最後に私は玄関のドアを開け、外を見回した。が、メイの姿は見つけられなかった。

…散歩か。

私はコーヒーを沸かし、椅子に座って新聞を広げた。

一通りの記事に目を通し、政治家に溜息をつき、明日の天気曇りと知り三十分経ってもメイは戻って来なかった。コーヒーは空になり、着の身は帰宅した時のままだった。

私は外に飛び出した。

家のドアから身を乗り出し、マンションの廊下を目にしたところで気付いた。

行くあてが分からない。

私はしばらく地面のタイルを見つめてから、ドアを閉めた。電話を取り、ダイヤルを回した。

「はい、こちら近工交番」

「近隣の者ですが、そちらに六歳ぐらいで迷子の女の子はいませんか」

「迷子ねえ…いつからいない子？」

「一時間程前からです」

「うーん。…いないねえ。お宅の娘さん？」

「…、はい」

「フルネームを教えてもらえる？あなたのものね。住所も」

失礼します、そういつて私は電話を切った。

薄暗いリビングの換気扇に向かい、そうか今はここで吸う必要もないか、と気付き、テーブルの椅子に腰かけて私は煙草に火をつけた。

二口煙を吐いたが、名案はなかった。私は肘をテーブルにつき、頭を両手で覆った。念の為と、鍵を持たせる必要もなかったか…。違う、やはり寂しい想いをさせてしまったのだ。

今はそんなこと考えても仕様がな。顔をあげ、もう一口煙草を呑んだ。メイが何処に向かうか、考えてみよう。この短い間、見たメイについてのすべてから。

暑いのが苦手。少し寒いぐらいが好き。差しこむような眩しさが苦手。麦茶が好き。ウーロン茶も苦手。おそらく苦いのが苦手。アニメのシークレット・アンフィルミエーフが好き。主人公のAnfiがステッキに息を吹き込んで薬を作るシーンがお気に入り。山奥から来た。浴衣・着物を気に入っている。新しく買った子供用の青の斜線が一本入った黒い日傘を部屋でいじっていた。多分、気に入ってくれていた。遠野のあの人が送ってきた。小さくて軽い。遠慮がちだった。子供らしく意思を我がままに示さない。明らかに付け焼き刃だが、敬語をよく使う。今朝お互い敬語を止めようと約束した。そして、私の娘かもしれない。

私は二本目の煙草に火をつけた。

玄関に日傘が置いてある。今日も残暑のきつい日差しだった。外へ出たとしたら、私の帰宅時間の間。今から最大一時間前。日の沈みかけた五時。陽の下でメイは日傘がないと立ってられない。メイの足取りは見た目の通り遅い。電車にも乗れない。お金も持っていないはず。唯一メイがウチに持ってきた兎の着物とセツタはここにある。そんなに離れているとは思えない。人気のない場所。衝動的な外出だろう。一番考えられるのは、散歩に行つて、迷子になった。以前唯一我々が外出したとき、デパートに行くための進路は人混みだらけだった。もし、人混みで路頭に迷っていたら、六歳のメイは警察に保護されていてもおかしくない。それにメイはあまり人氣が好きだとは思えない。だから多分メイが散歩するとしたら逆、公園のある方ではないか。そして涼しいところ。

遠い先でメイが途方に暮れているような気がした。

行こう。煙草をもみ消し、私は立ちあがった。買った饅頭を冷蔵庫庫に入れ、麦茶の残量を確認して家を出た。外は小雨だった。「いつの間に…」玄関に戻り、私は頭にハンチングを被った。そして右

手にメイの黒い日傘を持って再度家を出た。

メイが帰ってきたときのために、とりあえず一時間で戻る。時刻を確認し足を速めた。

だいぶ迂回しながら、小森公園についた。雨はすぐに止んだが、遅い夜が始まろうとしていた。空の陽は消え、静寂と薄暗さが薄い膜のように風景一帯を覆っていた。

私は十五分かけて公園内をくまなく走り回った。道端のベンチ。アスレチックの小山の中。歩道逸れた雑木林。メイの気配も感じられなかった。

この公園は、そこそこの小学校が建てられるぐらいの広さがある。その上、木がとても多い。公園全体が木に囲まれており、所々に林がある。かくれんぼをすれば鬼は真っ青だ。この公園が小森公園と呼ばれる所以である。おまけに陽のないこの視界。

考えが甘かった、と休みなしだった私の足は走るのを止めた。途端に肩が重くなり、息も絶え絶えに私は近くの植え込みに腰かけた。時計は六時半。探しに家を出てから三十分が経った。

家に戻っているだろうか。そんな期待が頭を過った。

そして無力感が胸を拭いた。見当違いだったのか。

私はアイスコーヒーを買い、煙草を一本吸った。缶はすぐ空になり、煙草は喉に合わず捨てた。

こっちの方だと思ったんだけどな。

方向が分からなくなっていてわたしは足を止めた。体にネバつくような雨が降った突端、すべてが分からなくなった。それでもふいに感じたおっかあの気配を捜そうとグルグル回っている内に帰り道が分からなくなつて、気付いたら沢山人がいる賑やかなここに出た。雨は止んでくれたけど、何処に行けばいいのかは分からない。すごい時間が経ってしまったかも。わたしは道端に腰かけた。

気のせいだったのかな。一帯の黒に一点広がつた透き通るような

おつかあの白。それは上から注ぐ黒い雨によって滲み、黒い地面に滲んで消えてしまった。・・・おっとう、が心配してるかな。また困らせてしまう。空を見上げた。星は見えなかった。

家に置いてもらうぐらいだから役に立たないと、思っていたのに・・・ずっと迷惑をかけてる。

おつかあが居るわけがない。わたしはわたしに強く言った。おつかあはわたしが戻されるとき以外は来ない、と言った。

早く、帰らなきゃ。着地するようにわたしは立ち上がった。

「なにしてるの？」お尻をはいたら横から声をかけられた。

前、麦茶のペットボトルをくれたお姉さんだった。

「こんにちは、えーと…」お姉さんが辿るように空を指で軽くかき回した。

「メイといいます」そう言ってわたしはお辞儀をした。この挨拶はもうできる。

「あ、そうそう。メイちゃんね。こんにちは。黒木えりと云います」そう言ってお姉さんもお辞儀した。

「こんにちは」わたしが何だかおかしくそう言っているとホウキを持ったお姉さんは隣に座った。

「何してるの」そう言ってお姉さんは私に首をかしげた。

「お家に帰るの、です」おっとうに心配されないために早く帰らなくちゃ。

「ふーん。一人？」お姉さんは怪訝そうに聞いた。

「はい。一人です」そう言うと、お姉さんは口を押さえて少し笑った。

なんでだろう。すると「あ、ごめんごめん。メイちゃんて敬語使えるんだね」とお姉さんは何故か謝った。

「へー。でも一人で何してたの。お父さんは？」

「お仕事」

「あ、そっか」たはは、とお姉さんはホウキを上下に動かした。

「君もね」怖い声が後ろから聞こえた。

わたしもお姉さんもそっちを振り返った。「あ、店長・・・」こないだのおじさんが腕を組んでお姉さんを見ていた。「あははは・・・失礼しました」そう言ってお姉さんはまたお辞儀をした。

「あれ、その子・・・」テンチョウさんが私をカカシみたいな顔で見た。この人もわたしの名前を知らない。「メイといいます」そう言ってお辞儀をした。

テンチョウさんはびっくりしたみたいに「やや、店長です。これはご丁寧にも・・・」と上手にお辞儀した。

はははは、とお姉さんはまた笑い、テンチョウと目を合わせるとまた「失礼しました」と言った。

なんだか、簡単だ。わたしは少し楽しくなった。「テンチョウさんとお姉さんはその服がお気に入りですか？」

テンチョウとお姉さんは顔を合わせ「いや、僕等はお仕事だからね。これは仕事用の服なんだよ」とテンチョウが言った。横でお姉さんが立ってうなづき「ワタシの本業は高校生だけだね」と言った。

わたしは頭を傾げた。

「じゃあなんでお出かけしないんですか」そう言うと二人はまたカカシみたいな顔になった。

そしてテンチョウさんが後ろを指差した。「ここが私達の職場だ」

あ。テンチョウさんとお姉さんの後ろの建物は見たことがあった。こないだおっとうと麦茶とコーヒー飲んだところだ。

だからわたしはここに座ったんだ。

「わたしも、ここでしごとしたいな」そうすればお金が入る。そうすればおっとうもあんなに出かけなくてすむ。ううん、おっとうもここで働けば楽しい。おっとうはコーヒーを飲みながら、わたしは麦茶を飲みながら、一緒に仕事をする。

「それいいね」笑顔でお姉さんが言った。テンチョウさんがお姉さんを見るとお姉さんは笑うのを止めた。

「ええと、メイちゃん、だっけ」テンチョウさんはわたしの前にしゃがみこんだ。そして頭に手を置いた。ざらりとした。

「お母さんは何処にいるの」

「え」何でそれを聞くのかよく分からなかった。「遠いところ、です」でも近くにきたような気がした。だから捜しに家を出た。でも雨が沢山振った途端、その場所が分からなくなった。

「おとうさんは迎えに来てくれるの」

「…分かりません」頭が、なにか渴いた。

「お家の場所はわかるの」

「もう少しすれば、分かると思います」なんだか、楽しいお話ではなくってしまった。なんでかは分からない。

「・・・お家の電話番号は」

「分かりません」体の水が小さなさじで掬っては捨て、掬っては捨てられているような、自分が減っている感じがする。

「お父さんはこの前一緒に来た人？」後ろでテンチョウ？、と言うお姉さんの低い声が聞こえた。

体の中の、水面が荒れている。わたしの体から力が抜けていった。ここの空気はわたしに元気をくれない。

「帰らなくちゃ」わたしはテンチョウさんの手から離れ、足を踏みだした。その足はわたしの体を支えることなく、わたしはかたい地面に倒れてしまった。

「はい麦茶」ワタシは麦茶の入ったグラスをテーブルに置いた。

「ありがとうございます」晴れない顔でもメイちゃんは丁寧にお辞儀をし、グラスにうつむいた。

結局、ワタシも店長も店を空ける訳にはいかないし、メイちゃんをどうしていいかも分からずとりあえずカウンター席に座らせた。

「どうしましょうか」カウンターでコーヒークップを磨く店長に聞いた。

「とりあえず、迷子で両親も困っているだろう。家の電話番号も

知らないようだし。警察に電話してみてくれ。両親も気付いているなら交番に連絡しているはずだ」

警察……。そっか、それならすぐメイちゃんもお家にすぐ帰れるだろう。「さすが店長。年の功ってやつですね」こういう発想がすぐ出るあたりが大人だ。

店長は「まだまだ若いさ」と言ってみんざらでもない顔になった。「そりゃあ、二十年も喫茶店やっていれば色々なことが分かるんだよ……」話が長くなりそうだったので「じゃあ早速電話してきますね」とだけ言ってワタシは店の黒電話に手をつけた。これも大人だ。

両手でグラスを持ちメイちゃんが顔をテーブルと向かい合うようにうつむかせストローを神妙に吸い始めた。「はい近エ交番」

「あ、こんにちは。えーと近エ五丁目の喫茶タナカの店員の者ですが……」

「どうしました」慣れた口調でオマワリさんは用件を急かした。

「はい、じつはここに五歳くらいの女の子が一人いて迷子のようなんですが」

「お客さんですか」

「……。いいえ。以前父親と一緒に来た子なんです、お店の前で一人で座っていました」

「今のところ、届けはありませんねえ……ああ。じゃあそっちの住所を教えてください」

「はい。近工町五丁目……」じゃあすぐ行きます、そう言ってオマワリさんは電話を切った。

「あ、電話し終わった？」店長が横にきた。「はい。すぐ来てくれるそうです」

「メイちゃん」カウンターを挟んで呼びかけると、メイちゃんは億劫そうに顔を上げた。「もうすぐお家に帰れるからね」

「本当……？」メイちゃんの声は今にも沈没しそうな疲労感を感じさせた。「本当。今おまわりさんが来てくれるからね」

その言葉を転がすようにメイちゃんはしばらく表情を動かさずに

いた。そして「ありがとうございます」と言ってまたストローに、さっきよりは勢いをもって口をつけた。

お母さんはいないのだろうか。色々の質問の途中でメイちゃんはパタリと倒れた。なんだか答えるのも辛そうで少し可哀想だった。複雑な家庭環境なんだろうか。以前父親と二人で居た時も、なんとか、付き合いたてのカップル同士のような初初しさのある不思議な印象を得たものだ。あの若めの父親は淡々とした口調で寝起きの様な目をしていた。ウチのとはちょっと、違う。頑固で不器用で憎めないワタシの父親は今も仙台からデコトラで野菜をどっかに運んでるだろう。繊細なんて言葉は知ってるだろうが馴染みもないし、漢字で書くことは一字もできないだろう。ドラマチックには展開しない家族である。

メイちゃんはどんな環境にいるのだろうか。色々と想像を膨らませてみたが、結局ワタシに何ができるかは分からない。こういう時大人だったらどうするんだろう。

店長に視線をやると、店長もメイを見ていた。というより、眺めていた。そして視線を磨くグラスに戻し、やはり上の空な感じで細かくグラスを磨いた。別に珍しいことじゃないのかな。

早くお父さんに会えるといいね。口にはださずにワタシはそう言った。

メイちゃんがワタシを向いた。そしてほうけていた目に生氣が燈り、ストンと席から降りた。ワタシはメイちゃんの向いたドアの方を向いた。「あ」

自動ドアが開き、勢いよくメイの父親が足を止めた。少し肩で息をすると、両膝に当てていた両手ごと前に傾けていた体を元に戻した。

突然の大きな音に驚いていたワタシと店長を見て彼は「失礼しました」と言った。

お姉さんとテンチョウさんがカカシになった。

「・・・メイ、無事だったか」おっとうはわたしの前に立ちそう言った。

「うん」おっとうの体から熱いもやが出ている。そして黒い帽子は濡れていた。「ごめんなさい」おっとうは「いいんだ」と言って、テンチョウさんとお姉さんの方に向いた。「色々とお世話になったように。ありがとうございます」そう頭を下げ、わたしの隣の席に腰掛けた。「エスプレッソを一つ頂けますか」そして帽子を取った。

「まあ、とりあえず一服しよう」おっとうの心には熱がなく、さざ波さえ立っていなかった。なんでこんなに静かなんだろう。唯一揺れたのは今朝、わたしにお留守番を頼んだときぐらい。わたしはその約束を破った。「ごめんなさい」

おっとうは頭を掻きながらわたしを見た。ちよつと困ったような顔をして、わたしの頭に手を置いた。「無事ならいいんだ」おっとうの手は少し温まっていたけど、ぐつぐつしていたわたしのあたまを穏やかにしてくれた。

「よかったね」お姉さんが微笑んで言った。

「うん」わたしは力をいれて頷いた。「どうも色々のご迷惑をお掛けしました」おっとうは頭を下げた。お姉さんは手を何回も振った。「いえいえ。ガラガラ席の一つ使っただけなので痛くも痒くありません。ね、メイちゃん。お客さん全然来なかったよねー」
「うん。ガラガラだった」本当にお客さんは誰も来なかった。お姉さんは笑っていないテンチョウさんに「ごめんなさい」と頭を下げた。

「でも、オマワリさん呼ぶ必要なかったね」

おっとうの心に一輪、波紋が広がった。

そしてドアが一人でに開く音がした。「お邪魔しまーす」青い服と帽子のお兄さんが入ってきた。テンチョウさんがお兄さんのトコロに行った。「あはは噂をすれば、だね」お姉さんは立ち上がり舌を出してわたしに苦笑んだ。

テンチョウさんと青いお兄さんはしばらくお話をしてから、お兄さんが先頭になってこっちに来た。そしておっとうの前に立ち、「この子はあなたの娘さんですか」と聞いた。

「・・・はい、そうですが」おっとうは普通にそう言ってくれた。でもちよつと声が違う。

「この人は君のお父さん？」今度はわたしに聞いた。

「はい、そうです」わたしもそう答えた。

「ごめんなさい、せっかく来てくれたのに」お姉さんが横からそう言った。

「お嬢ちゃんは幾つなの」お兄さんがまたわたしに聞いた。「六つです」

「じゃあ小学生？」

わたしは首をかしげた。

「じゃあ幼稚園生かな」

「ヨウチエンセイって何？」

「今日のお昼は何をしてたの？」

「お留守番してました」

「昨日は？」

「昨日もお留守番」

青いお兄さんがおっとうに向いた。

「お手数ですが、ちよつと交番でお話聞いてもいいですか」

口をつけていたエスプレッソを置きおっとうは言った。「はい。いいですよ」

「店長？」熱を持った声でお姉さんが聞いた。「何を話したんですか」一瞬困った顔をしてから、テンチョウさんも熱を發した。「この二人は家族じゃないよ。親が子をさん付けで呼ぶか？」突然飛び交う熱達にわたしは体が苦しくなった。暑いよ。頭がぼうとしながらわたしはさすがにようにおっとうに視線を向けることしかできなかった。

「この二人は家族じゃないよ。親が子をさん付けで呼ぶか？」

「そんな・・・、そんな人の好き勝手じゃないですか？てゆうか、こんなところで言うセリフじゃないですよ！」

投げあう熱の端々がわたしを撫でた。おっとうも突然の出来事に少し困った顔をしている。青いお兄さんも同じだ。おっとうに頼ってばかりじゃ駄目。わたしは必死に麦茶を吸った。が、あまり効果はなかった。氷はほとんど溶けていたし、なにより突然の温度差はわたしを異様に疲れさせた。クーラーのスイッチ・・・。わたしは落ちるように椅子から降りてクーラーのりもこんを探そうとした。

「きゃっ」体が持ち上げられ、わたしは椅子に戻された。そして大きな手にかぶされた両手の中に目の覚める冷たい感触があった。大きい氷の入った水のグラスだ。「これは冷えてる」おっとうはそう言ってわたしに笑いかけると気持ちの良い大きな手をわたしの手から離し、椅子から下りて立ちあがった。お姉さんがおっとうに目を向けテンチョウウさんがおっとうを横目で見た。「お会計お願いします」お釣りを受け取るとテンチョウウさんに「迷惑をおかけして申し訳ございませんでした」とお姉さんに「ありがとう」と頭を下げた。「いえ・・・」お姉さんはそう呟きテンチョウウさんは黙っていた。二人の熱はそれぞれの形でテンチョウウさんとお姉さんの中に留まり、その端がわたしに触れることはなくなった。

「お待たせしました」そう言っておっとうは青いお兄さんについて。「メイ、行こう」

わたしはおっとうが何て頼もしいんだ、と思った。おっとうはわたしと同じ熱を生まない心でしかも、熱を防ぐこともできる。こんな簡単に・・・。でもおっかあとは違う。心地いい黒い部屋の中の奥のおっとうの底に何回かみた、薪でくべられたようにゆらゆらと水面に映ったピンク色。追いかける背中の端にそれを浮かべ、わたしはおっとうの後に走った。

調べれば、書類上では、メイが私の娘でないことがすぐ知られる。私は認知していないが、心当りのある女性から送られてきた娘だ、

と警察官に伝えた。勿論、そういうことなら：などとは言ってはもらえなかった。

メイは、書類上では、誰の娘でもない。迷子届けも搜索願いも出ていない。メイの嫌がる様子も見受けられなかったためだろう。私とメイは帰された。

街灯もまばらになり、私とメイは先程とはうって変わって静かな暗闇の中で家路を辿った。何時間か前、記憶のメイに聞いた言葉達は実際のメイを横にして、口から出す必要性に迷う。メイも少なからずとも同じなのかもしれない。

なら、しゃべらなければいい。

なぜメイは外に出たのか。その理由は私を少し不安にさせた。それは私からすれば何年ぶりかの頼みごとだった。それが破られることは、メイにとって外に出ることが私との約束を破る以上のことだったということ。止めよう。切りがない。

「はい。そうです」

私を父と肯定してくれた言葉。それだけを余韻として許し、私は雪の灯りのようだったメイの母親を想った。

薄暗い風景は見慣れた雑踏へと変わっていった。「メイ、眠いか」

「ううん」

その中でやわらかく灯る家々の明かりが私を少し切なくさせた。

「じゃあちよつと散歩に付き合ってくれないか」

「うん」

私は小山公園に向かった。何のためかはなんとなくだが、多分寝たら仕事だからだ。

家の前を通る道順を辿った。メイが少しでも道を覚えてくれればと思う。

公園に近づくほど、メイの足取りは心なしか軽く、確実に早足になっていった。

「わ：」立ち並ぶ木々に穴を開けたように、ひっそりと設置された入り口に着くと、メイは声を出した。

何時間か前に来たときとは、また何か違う。公園の自然が暗闇を深くしている。

私達は緑道を歩いた。私は雑木林やベンチに今日メイを探していた記憶を眺めたりしながら、メイはあちこちに忙しく頭を向けながら、公園の内側を円状に囲む砂利道を歩いた。

一周しかけたところで、私は中心へと向かう石道に足向きを変えた。メイも後ろに続いた。

するとメイが走り出した。「あ。メイ、気をつけろ」

私の注意に丁度良く、メイは林を抜けたところで転んだ。私は駆け寄った。「大丈夫か」

私の言葉に答えずメイは前方に顔を向けていた。私はメイの体を持ち上げた。「しょうこ。小さな湖と書くんだ」

「しょうこ：」眼前に小さく広がったこの小湖は公園の中心に位置する。高い木々に囲まれ夜には秘密を思わせるひっそりと開かれた場所だ。林から十歩程度を余地とし、小湖は黙し凜と構えていた。四百メートルグラウンド小程の水平な楕円湖の上空には、家もビルも電線もなく林に縁取られた空を仰ぐことができる。昼には差し込む日光で川底が見える程澄んだ湖だ。小さくはない公園であるが平日の遅い夜にはほとんど人はこない。「ここは私のお気に入りの場所なんだ」外の自然の空気と繋がっていたい夜、特に冬には携帯灰皿と缶コーヒーを持って私はここで三十分ほど静かにしていたものだ。

私に降ろされたメイは湖の淵にまで歩み寄り、しゃがみ込んで水面の中央を眺めた。「なんてすてき：」

「ああ」私はそう答え、木を背に煙草に火を点けた。勿論携帯灰皿は持っている。心地よい宵に吹き揺れる煙、それを見ながら私は一日の区切りを思った。

「星が見えないここに、こんな綺麗に水があるの」メイは濃い陰になった後ろ姿を動かさず、そう呟いた。

「…そうだな。私もこの景色には落ち着くよ」

「静かになれる？」

「うん。静かになれる」

メイの手が縦に振られるのがシルエットで見え、ぽちゃん、と湖面にしとやかな波紋が広がった。

「なんで熱を出して周りの人にぶつける人がいるの」再び広がった静黙にメイの声が眩かれた。

「…熱？それは誰のことだ」

「・・・お姉さんやテンチョウさん。最初から、みんな、小さな熱の粉はそこらに飛んだり、浮いていたり、降ってきたりしたけど：あの青いお兄さんが来てから今までの小さな熱のカケラを集めて大きくして、投げあってた」

「…。それは声を大きくしたり、眉毛が内側に傾いたり、目に力が入ったりしている時かな」

メイの頭が横に傾いた。

そしてこっちに暗がりでのっぺらぼうな顔を向けて言った。「そんな感じ」

私は煙草を一口呑んだ。「ひよっとしたら、お姉さんも店長さんもメイのために、または私達のためにそうしたのかもしれない」まだ傾いたままのメイの頭に私は続けた。

「いや、結局自分を好きになってもらうため」

「……………。好きになってもらうためには、熱を出さなきゃいけないの？」

「自分のいいところ悪いところ、それを分かってもらうために、たまに熱を投げなければいけない時がある、そう考える人は沢山いると思うよ」

「・・・おっとう、もいつか投げるの？」

「かもしれない。でも私はぶつけるのもぶつけられるのも苦手なんだ」体が僅かに振るえたのを抑え、私はそう答えた。

「わたしも」メイは振り返り、私の方に歩いてきた。表情は見えないが、その声は今のやり取りの中で一番確かなものだった。

「じゃあ、行こうか」目の前で立ち止まっているメイにそう言い、私は煙草を携帯灰皿に差し込んだ。

「うん」私たちは小湖を後にした。

小森公園を抜け出、私たちは眠ったような住宅街の坂道の端をゆっくりと下った。長い様に感じた一日も名残惜しい夜は気づけば後は寝に着くだけである。

「好きになってもらったとき、その人はどうなるの」メイが私の背後からそう聞いた。

大分メイとの距離が離れていると分かり私は歩を緩めた。

「ぬくもりをもらおう」

「ぬくもり、って？」

「例えば、手をつなぐ。その人と自分、二人で二人だけの暖かさをつくり、二人で温まるんだ。その心地良さがぬくもり、だと思うよ」

「∴。おっとうも、ぬくもりが欲しい？」

「そうだね。欲しいよ」

左の手の平に何かが触れて離れた。振り向くとメイが右手を素早く戻した。メイの指が触れたようだ。メイは立ち止まり右手を左手で胸に抑えた。

私は立ち止まり、少し躊躇って左手を広げメイに向けて伸ばした。

「ありがとう」

街頭の下でメイが微笑んだ。

私とメイは坂道を下った。家まではあと十分もかからないだろう。メイの歩幅は狭い。私も歩幅を合わせた。

私は眼を細め、歩く道を見つめた。おっとうと呼んでくれてありがとう。

繋いだ手が二人の陰を一緒にしていた。

L e n u m e r o 3 (前書き)

いくらかの日を経て。

Le n u m e r o 3

メイを小学校に行かせるべきだろうか。メイを半日以上家に閉じ込めておくのはかわいそうだ、と思うのだ。だが、外を散歩させていれば、小学校が義務教育である限りいつかは顔見知りになった人達から怪しまれてしまうだろう。小学校に入れるにはまず書類上でメイを私の娘にしなければならぬ。そしてメイは小学校で無事に心平安にやっていけるだろうか。「短い間です」メイの母の言葉の扱いに困った。

そして、一つの季節を越えた。秋風に白さの混じる頃。

「ただいま」私はそう言いながら靴を脱いだ。

「おかえりなさい」玄関で私を迎えたメイは、少し興奮気味に「コーヒー飲む?」と言った。

「ああ。お願い」そう言って私は上着を脱いで、テーブルについた。

するとすぐにテーブルにはおいしそうな湯気を昇らすコーヒーが置かれた。インスタントではない。

「早いな」恐らくこの時間に沸くようにコーヒーを用意しにくれたのだろう。

メイの前には細長い暗雲が描かれた白い湯呑み。中は、氷の入っていない麦茶。

「ありがとうございます。いただきます」そういつて私はコーヒーに口をつけた。

「あー生き返る」私はだらしなく溜息を着き、そう言った。

「おいしい?」まだ麦茶に口をつけず、メイがそう聞いた。

「ああ。一回くたばって生き返ってしまったぐらいおいしいよ」

メイは笑った。そして麦茶を一口飲んだ。「あーいきかえる」

「今日は何をしていたんだ」

「お絵描きしてた!」

「へえ。じゃあ、見せてよ」

「う、うん」

「照れるな照れるな」口がくすぐったいのを抑え、私は部屋を見渡した。だが、部屋の隅にクレヨンと色鉛筆が行儀良く置いてあるだけで、画用紙などは見あたらなかった。「ん、どこにあるんだ」

「こっち」メイは立ち上がり、寝室を指差した。私はなんとなくメイの顔に真剣味を感じ、軽い心持ちで見てはいけないのか、と少し神妙気味に「よし」メイの後について寝室に向かった。

メイは私の眼を確認するように見て、何かを告白するときのようにじつくりとドアを開けた。「入って」メイは中に入らず、私の入室を促した。

「なんだこれ」私の・・・今はメイの布団の上に画用紙が一枚、置いてあった。黒い人影が四肢をだらしなく伸ばした絵。そのシルエットの人？は全身が脱力しているとれる。つまり、TVの殺人現場などで見る人形のマーキングのようだ。判断に困り、私はもう一歩中に入った。

すると壁に並べて貼られた三枚の画用紙に気付いた。証明写真のような、上半身の人の黒いシルエット。肩の下には白く文字が書いている。

セバスチャン (Sebastian)。太郎。田中年男。

「何だこれ」私はメイに振り返った。

寝室の入口からメイは心配そうに言った。「分かる？おつとうを殺した犯人」

私は最初の画用紙に目を戻した。くたばったシルエットの下の方に、丁寧な達筆で「おつとう」と書かれていた。

「私は殺されてしまったのか？」無念そうに目を瞑りながらもメイは頷いたので、私はなんともいえない悲しさを抱えながら、私の真っ黒な死体の上にもう一枚、小さく破られた画用紙が配置されていることに気付いた。「わたしには犯人が分からないの」メイが横から重い視線を私に向けていた。私はとりあえず視線を、私のシルエット

ットに向けた。

「犯人名―」そう読める。私のシルエットの右手が不自然なところで内側に曲がっており、不自然なのはメイの画力の個性だとして、伸ばされた腕の先の人差し指が無念そうに「―」の伸ばし棒端に横たわるように配置されている。「―」の最後の方が恨めしそうにインクを散らして途切れていた。「これは―」

「ダイイングメッセージ」息を殺すような声でメイが呟いた。変な言葉ばかり覚えるなよ。

「三人の誰かが犯人なんだけど、分かる？」メイの表情は真剣そのものだった。私は唇を指で撫でた。

そして布団を背にした。「コーヒーを飲み干したとき、犯人もまた干されるであろう」

振り返るとメイが首を傾げていた。イマイチか。私はとりあえず有言実行するか、ということでテーブルに向かったのだった。

「犯人はタナカ？」

私がコーヒーを飲み干すと、メイは待っていたかのように私の方にテーブルから身を乗り出した。

「うん」

「やっぱり！」メイが叫んだ。

私は慌てて両手を振った。「あ、違う違う。解説を始めようと思っただけだ」

「え、違うの？」メイはそっかあ、と呟いた。

「ごめんごめん。それは説明してからにしよう」じゃあ寢室に行こうか、私は席を立った。

そして「そういえば、何で田中年男が犯人だと思った」と聞いた。

「…名前が、怪しいから」

「まあ…確かに」私はうつむいたメイを見てから寢室のドアを開けた。

画用紙などはそのまま、こうして全体を見ると散らかった様子がよく分かる。

「後で片付けなきゃな」

「何？」

「いや、何でもない。じゃあ解決の時間だ」私は布団の上を指差した。

「私の・・・被害者のダイイングメッセージ。やっぱりこれがその字の通り犯人の名前を表している」

メイはうんうん、と眉間に小さな皺を作り真剣に聞き入っている。

「犯人名――、一見すると犯人の正体を書きだそうとして途中で絶命したかと思ってしまうが、実はこれが犯人の名前をそのまま表している」

「え！」メイは王道な反応をした。私は得意になってきた。

「でも、なんで途中で死んじゃったわけじゃないって分かるの？」私はメイに水を挿された気分になった。

「：私が無念のまま死ぬことなんて無いからだよ」

「：おっとうすごい」メイは心底感心したようにそう呟いた。

「ふ・・・じゃあ推理に戻ろう。Sebastian、太郎、田中年男。ダイイングメッセージを良く見てみたまえ」

うーん。文字通り食いつくように、布団の上に乗ってメイは画用紙を睨み込んだ。

「だめえ。分かんない」メイは白旗を上げると後ろに倒れこんだ。

「じゃあ、一字づつ、割って見てみなさい」

ううん・・・。メイは少し億劫そうにまた布団を覗きこんだ。

「犯：人：名：・・・：あっ」

「そう。名の字こそが被害者のダイイングメッセージだったんだ」私はうつむき、眉間を指で抑えた。

「つまり、私を殺した不届き千万、酌量無用の犯人とは：」「タローくん!？」メイが叫んだ。

「・・・」太郎のシルエットをりりしく指差していた私は、一番おい

しいところを奪われ、膨れ上がった探偵気分が一気に逆流し、りりしく構えた私の顔をみるみる赤くした。「ご名答、ワトソン君」

「でも、でも…」風呂でも入ろう、と萎えた気分語りかけ寢室を出ようとした私にメイが立ちふさがった。

「太郎くんはおつとうに不当な利子を請求されて家を担保に奪われちゃったんだよ」一息でメイがそう言った。

「…なんで？」私にとって二つの「なんで」だった。

「太郎くんがおつとうに高額なお金を借りて競馬と女につき込みちゃったんだって…」

「…立派な犯行動機だな。これ、ビデオで見たのか？」

「ううん。モンローさんが出してくれたクイズなの。犯人が分かったらアンフィステッキくれるの」

「えっと…。どこの方？」

「ええと、公園の近くのおもちゃ屋さんら辺の道」

十五時以降なら、と散歩を許可していた。子供が毎日、日が沈むまで家に閉じ込められるのなんて酷すぎると思ったからだ。勿論携帯電話を持たせた。私の携帯に着信があれば、私が飛んでいくことになる。知り合いができるのは悪くないことだが…。

顔ぐらい見に行く必要はあるだろう。

モンローさんか…。

私を殺しやがって。私はすべての画用紙を裏返して重ね、玄関の古新聞の上に置いた。

「いたか？」玄関で靴を脱ぎながら私はそう言った。

「うん。いた」ポットに向かいながら、少し興奮気味な口調でメイはそう言った。

「話してきたのか？」そう聞きながら私はテーブルについた。

「ううん。陰からこっそり覗いただけ」コーヒーと氷の入っていない麦茶をテーブルにおき、お盆を胸に抱えメイはそう言った。「めしあがれ」

「ああ。ありがとうございます」いただきます、そう言って私はコーヒーに口をつけた。

時計が十八時を示していた。

メイが麦茶を飲み干し、「じゃあ行こうか」私がコーヒーの最後の一口を飲み干してそう言った。

「うん！」メイは椅子の下から屯着を取り上げ、立ちあがった。抜かりはないようだった。

「じゃあ：私は動きやすい服にでも着替えてくるか：」ちよつと待ってくれ、そう言って私はいそいそと寝室に入った。

「よし！行こう」

「うん！」

そして私達は家を出た。

マンションを出て右と左に分かれた道を公園の方に向かった。

私達の生活区画を正方形とする。その中心を私達のマンションとする。左上角が近工駅。すると枠の右縦線の真中が小森公園の入り口だ。そして上枠線の真中とマンションを繋ぐ線のこれまた真中辺りに喫茶タナカがある。

メイのいう「おもちゃ屋ら辺」は小森公園と上枠線真中をつなぐ線の真中辺りになる。つまり全体の右上ら辺にあたる。

「メイ、そんなに急ぐ必要もないだろう。裾を踏むぞ」コツコツコツとつかかけを忙しく鳴らすメイに言った。

「うん」そう答えてもメイは着物の狭い歩幅で早歩きを続けた。

小森公園の入り口が見えると正方形の上に向かって曲がり、公園を囲む灰色の塀から頭を覗かせる青々とした木々たちを右手に見上げ、眺めながら進んだ。

同じようにメイは私の前で、夜との違いを見るように公園を見上げ、進んだ。しばらく歩くと、公園の塀に埋まるように、小さな窪みの中に地蔵が一体置いてあった。

「なんだか潰されてしまいそうな地蔵だな」通り過ぎながら、押し込まれたように居る地蔵を少し不憫に思った。

「大丈夫だよ」メイは後ろ向きになって地蔵に笑顔を向けながら言った。きっぱりと述べたメイを意外に思い「なんでだ？」私はそう聞いた。

メイは地蔵に手を振り、前に向き直った。「お地蔵さんは飛べるんだよ」

「…そうなのか」地蔵が飛ぶのは、私の世界ではひどく不格好だった。

「うん、むかし火事るとき飛んだんだよ、っておっかあが言ってた」「おっかあが…」

「うん、だから大丈夫なんだよ」メイは得意気に言い、「おっとう？」と顔を覗きこんだ。

目に入ったメイの顔が不安そうだった。私は自分の顔が沈んでいたことに気付き、顔を上げた。「それは知らなかった」

そして「じゃあこれは知ってるか」そう言っただけからぞく柿の木を指差した。

メイはそっちを見上げ「かき？」と言った。

「そう。美味そうな柿だ。だから今年の冬は寒くなる」

メイは眉をしかめ、首を傾げた。「なんで？」

私は顎でもう一度柿の木を指した。「ああいう風に、見事なオレンジ色の柿ができるのは、今年の冬が寒くなるからなんだよ」

「へえ」感心するような、困惑するようにメイは通り過ぎる柿の木を熱心に眺めた。

私はそんなメイの横顔を眺めた。冬になれば、メイも過ごしやすだろう。日傘をさすこともなく。そしたらピクニックに行ける。それよりも、子供らしく、雪合戦もできるかもしれない。

私がやると不格好かな。そんなことを考えていると「いた」メイが転んだ。

「大丈夫か」駆けより両手を前に着いたメイを抱き起こした。メイは顔をしかめているが、別に顔を曇りにうつむかせることもなかった。裾の長い着物で良かった。膝をさわっても「痛くない」と照

れるように言った。私はメイの手をとり、汚れた手の平をハンカチで拭いた。準備に念の入ったメイに対抗して色々持ってきて良かった。メイは「ありがとう」と言って反省するようにうつむいた。

「休憩するか」私はメイを近くの駐車場の柵の石台に持っていく、「だいじょう」…ぶと言おうとしたメイを置いて私は隣に座った。

「私が一服したい」

うそ…と呟きかけたメイに「ああ生き返る」と私は缶コーヒーをグイと一息で飲み干した。「ほら。麦茶。生き返れ」とメイにペットボトルを渡した。

メイは困惑と笑みの混ざったような表情だったが、ペットボトルを受け取り、笑みが勝ち、そして麦茶を一息で飲み干した。正直驚いた私に「一回死んで生き返ったみたい」とメイは笑いかけた。

「で、モンローさんはどんな人なんだ？」おもちゃ屋ら辺を間近に控え、隣で歩くメイに問いかけた。

私と繋いだ手を振りながら「仕事の無い人」と少し上を見てからメイはそう答えた。

モンローさんという仕事がなくてメイにクイズを出してプレゼントをくれる私を殺した女の人。

「面白そうな人だ」

「うん。面白い人だよ」でもそう答えたメイは少し機嫌が悪そうだった。「メイ。怒ってないか」

「うん。だって太郎くんを犯人にするなんて」すねる様にそう言った。

あれ。私が殺されたのはいいのかなあ。

私がそう考えていると、「あ。あそこ！」メイが指差した。

指差す先には、地面に赤々とけばけばしいレジャーシートを広げ、その上で沢山の雑貨と派手に座る、見る限りホームレスの人が見えた。インドかどこかの修行を終えた、お爺さんに見えた。

「男…？」目に優しくない全体像が近づいていくに連れ、近づいて行きたくない。倦怠感が私の顔にぶら下がっていった。

L e n u m e r o 4 (前書き)

モンローさんはお爺さんでした

L e n u m e r o 4

「お。メイさんじゃあないか」大きく藤娘の描かれた手ぬぐいを頭に巻いたお爺さんが親しげに手を上げた。お爺さんの動きに合わせて、手ぬぐいからはみだした長髪が揺れた。

「今日は」メイが大雑把に頭を下げた。顔はやはり、ふてくされている。

「ああ。今日は。今日も可愛いね」あぐらをかいたまま、綺麗とは言いがたいお爺さんは降ろした手でメイの肩をバンバン叩いた。そしてメイの隣に立つ私に目を向けた。

「はじめまして。メイの父です」私はメイよりは丁寧に、事務的に頭を下げた。

「おお。これが噂のおっとう様か。イヤイヤ、丁寧な方だ。はじめまして」そう言って私と握手した。

「で。謎が解けたのかな」目線だけをメイにやり、先生が生徒を指導するように言った。

「うん」と頷き喋ろうとしたメイをモンローさんは手で制し、「悪いが、今いいところだ。ちょっと待ってくれ」と言った。

顔を強張らせたお爺さんの視線は私達の左後方に向かっていた。ここは逆L字型になっている道路の外側の角に当る。私は左手の道に視線を向けた。お爺さんのほぼ向かい側におもちゃ屋があった。どこの町にもありそうな、こじんまりとした、人気も流行もない、玩具屋さんだ。前には自転車が三台止まっていた。

「あつ」メイが私の横で小さく高く声をあげた。おもちゃ屋をちよつと先に行ったところで犬が横に寝そべっていた。微動もしない。腹の部分が真赤に染まっっていて、手や顔など全身にも斑点のように血の色がついていた。

「いいところ？」私はお爺さんを振りかえった。

「その通り。座して待て」お爺さんが絨毯の上を手の平で叩いた。

メイが私を見上げた。

「おい。止めんか」犬のところへ向かった私の背中にお爺さんの怒鳴り声が響いた。犬の寝転がるコンクリートの地面は冷たそうで、とりあえず私にとって安らかな場所ではなかった。気にせずに進む私に再度お爺さんが大声を放った。「子供がどうなってもいいのか」私はお爺さんを振りかえった。メイはお爺さんから数歩距離をとり、耳を塞いでいた。自然と目に力が籠った。

「勘違いするな。お前さんのじゃない。見てみる」歩み寄った私に動ずることもなく、お爺さんは顎で私の後ろをしゃくった。私はおもちゃ屋を見た。

「あの犬死んじゃったの？」そう聞いてきたメイの頭に手を乗せ、私はお爺さんの方を向いた。

「説明してくれなければ分かりませんが」

「だから言っただろ。今いいところだって」顎の白い髭をぽりぽり搔き、お爺さんはまた自分の隣をバンバン叩いた。私もメイも座ろうとはしなかった。

そして後ろで鈴の音がした。おもちゃ屋のドアが開き、子供が賑やかに出てきた。三人の男の子は小学生ぐらいに見える、メイよりは上の学年だろう。私がお爺さんを見ると、お爺さんは黙ってうなづいた。

「おい犬の死体だぜ」とふとっちょの子が言った。「まじかよ」
「まじで」残りの眼鏡と茶髪の子達が言った。

すぐに犬は子供三人に包囲された。「血すげー」「ほんとに死んでんのかな」「こういうの触ると病気になるって死んじゃうんだぜ」ふとっちょが足でつついた。「かてえ！」

「まじで？」他の二人も続いた。

「こりゃ死んじゃっただろ」

「仮死状態かもよ」

「どっか自然の中とかに連れてってあげたいね」眼鏡の子が言った。

「じゃあお前運べよ」ふとつちよが言った。「触ったら感染するからちゅーいしろよ」茶髪が言った。

早くしろよ、ふとつちよが急かした。やばいって、茶髪が警告した。

「…死んだら親が悲しむから、止めとく」眼鏡がうつむいて呟いた。

「ちっ。根性無し」ふとつちよが言った。「口だけだ」

「いや、命にかかわるって」茶髪が言った。「しかし本当にすげーな、血」

好奇心を一通り味わった子供達は口を止めることなく、自転車へと向かった。

三人が自転車に乗り込んだ。

「死んだ生き物はただの肉だしね」三人の誰かがそう言ったのが聞こえた。

そして、棒状のものが宙を舞った。感情もなく、大きく弧を描きながら、三台の自転車の内の一台の車輪の隙間に挟まった。その杖がお爺さんの手元から飛ばされたと分かったとき、その自転車が倒れ、他の二台もドミノ式に子供達も含め、続いて倒れていった。

「うわ」三人三様に声をあげ、三人共こっちを見た。「何すんだよ!」ふとつちよが言った。他の二人は萎縮していて、たまに思いだしたように、いてーなどと呟いてた。お爺さんは友の敵を見るような形相で三人を見据えていた。「お前等どこに行く」箆らせたような、ドスの効いた嫌な声だった。

ふとつちよと眼鏡が黙り、茶髪が「危ないじゃないか」と言った。声が震えていた。

「可哀そうな犬を置いていくのか」恐面の表情も微動させずお爺さんが言った。

「関係ねーだろ」ばつが悪そうにふとつちよが言った。

「引き取る者もない、一人で、孤独に死んでいくこの生き物に何かしてやろうと思わないのか!」お爺さんが叫んだ。ふとつちよ

の肩が大きく揺れた。

「だって」擦りむいた膝小僧を抑え、眼鏡が言った。「触ると病気になるっちゃうんだよ？」今にも泣きだしそうだ。

「手袋をすればいい。お前達がさっきやったように足で何かの上に乗せて、運ぶのもいいだろう」

「言い訳をするな！」お爺さんはそう叱責した。私は耳を塞ぐメイの肩を抱き寄せた。

「じゃあ、あんたがやればいいじゃないか」茶髪が裏返った声で叫んだ。

「他の人がやればいい。そう言いたいのか！」物を掴んだお爺さんに私は右手を伸ばし制した。

「ごめんなさい。メイが怖がっているの」私はそう言って少年に近づき、顎で帰宅を促した。モンローさんが私に細めた視線をぶつけた。

三人はお互いの目を合わせ、戸惑う手つきで自転車に乗った。漕ぎ出すための準備のようにこっちを見た三人に「命に敬意を払え」お爺さんは睨みつけ、そう低く言い、そして口元だけを薄く笑わせた。「後悔するぞ」そう付け加えた。

三人の表情がつまったように動きを失った。

そして「なんだよ」と呟き「こじきが偉そうにしてんじゃねえよ！」とふとっちは言い捨てペダルに足をかけた。残りの二人も続き、三人は早々と走り去って行った。くそジジイ！遠くから何回かそう聞こえた。

そして三人の姿が見えなくなった。

私は溜息をつき、犬のところへと向かった。メイも小走りで続いた。

「生きてる？」額に汗を浮かべ、メイはそう聞いた。息も少し荒い。状況に疲れたのだろう。

「多分」私は首を振った。死んでしまったのは結構前だろう。あの子供が言ったように死後硬直が全身にきていた。

「じゃあ、ちょっと埋めてくる」私はそう言って子犬を持ち上げた。捨て犬だろうか。首輪は付いていなかった。

「私も、行く」メイが横についた。

「大丈夫か」私がそう見下ろすと、メイは疲れたように、でも笑顔で言った。「うん。大丈夫」

「そうか」メイをここに残すのは酷だった。そのくらい私が気をきかすべきだった。そんな気遣いもできないとは、私も気が立っているのかもしれない。モンローさんに？ いや、小学生が説教されようがお爺さんがジジイと呼ばれようが、私は多分変わらない。

きつと、犬の孤独とメイの戸惑いが放置されたのと、なにより自分がそれを解消できなかったのが、許せないのだ。

「行こう」私はメイにそう言って、お爺さんの方向にお辞儀をした。そして私達は来た道へと歩を向けた。

「こっちだ」立ちあがっていたお爺さんが目の前のアパートの中を杖で指した。「近道がある」

アパートの通路の先に脇道があり、その先に小さな雑草に囲まれた入り口があった。私達三人はそこから公園に入り、公園の端で木の密集した人気のない一角の松の木の下に埋めた。黙祷を終えるまで三人共黙っていた。

「で、犯人は？」戻り道、お爺さんがメイに聞いた。

私は肩に触れメイを促した。「・・・太郎くん」メイがお爺さんに言った。

「それはおっとうさんの答えではないかな」お爺さんが杖で私を指した。私は答えた。「そうです。メイは太郎くんがそんなことをするのが許せないようですよ」視界で不愉快に引っ掛かる杖の先が下ろされ、お爺さんが鼻で笑った。「で。メイちゃんは誰が犯人だと思いますの」

「違うの？」メイが聞き、お爺さんが勿体ぶるように首を傾げた。おもちや屋向かいの赤い絨毯の前に着いた。

「分かんない。でもセバスチャンも太郎くんも殺人するわけないし、

おつとうが殺されるわけない」語尾を強く、メイはそう答えた。

お爺ちゃんは微笑み、古布で縫い合わされたツギハギの袋から見たことのある杖を取り出した。「その通りだ。それが正解だよ。それを忘れないようにな」そう言ってAnfistekをメイに渡した。

わあ、と小さな歓声を上げ、メイはそれを受け取った。私を見た嬉しそうなメイに、私が薄く微笑み頷くと「ありがとうございますマダムさん」とメイは嬉しそうにそれを小さく天に掲げた。

「ありがとうございます」私がお辞儀すると「また来なさい」お爺さんはそう言って絨毯の上に胡坐をかいた。

それを一目し「じゃあ」そう言ってメイの背に手をやり、私達はお爺さんに背を向けた。

「ワシだって、本当は怒りたくないんだよ」背中越しにお爺さんの声が聞こえた。

振り向いた私に「すべて子供の未来のためだ」そうお爺さんが言い伏せるように言った。

私は少し口を笑わせお辞儀をした。そして顔を少し困惑させたメイの手をとり、帰り道へと向き直った。「もんろーさんありがとうございます」

「傍観は、静かであれど何も生み出さん。あんたは逃げてるだけだ」背後から聞こえた声に私は振り向かず、私達は家路についた。二十時。私とメイは日の消えた帰り道を黙って歩いていた。

「あの人もぬくもりが欲しいから熱を投げるの？」メイの履くつまかけの乾いた足音に合わせるようにメイの声が暗がりには響いた。熱を投げる。その意味を私が完全に理解できているかは分からなかった。「私が熱を投げていたのはどんな時だ？」

メイがほうけたように顔をこっちに向けた。「おつとうが？ないよ」

怒る、と同意でいいのだろうか。「あの人ってモンローさん？」

「うん」

「あの人は…、ぬくもり、突き詰めればそうなるのかも知れないが」

子供のため、と言っていた。道德教育のつもりなのだろう。でも、優しく諭すことはできないのだろうか。私には怒ることが誰かのため、とはどうしても思えないのだ。結果、誰かのためになったとしても。結局イラつくから、怒る。それに尽きると思うのだ。「いや、子供のため、と言っていたね」

「あの三人の男の子？あの子達のためになるの？あんなに投げつけられて子供たちは乱れてたのに？」

「きつとあの人は思いやりを教えたかったんだ。熱をぶつける、ということは普通に言うよりも相手の頭に印象深く残る。モローさんの言葉があの子達の頭の中で転がり、時間をかけて、たくさんの出来事と共に、その通りにすべきだったんだ、モンローさんは正しかった、と教訓になる可能性は十分あると思う」

「犬をほおっておくのが悪いことだったの？」

「分からない。命を軽く扱うのはいけないと思うが、死んでしまったものを供養しなければならないか、と言えば、私は、そうした人がそうすればいいと思う。でも、そういう他の命を思いやれる、心に優しい余裕を持った人は素敵だと思うよ」

「おっとうは埋めたのに、なんで最後、もろーさんはおっとうに熱をぶつけたの？」

「私は熱を投げるのが嫌いだ。投げられるのが嫌いだから。私は自分が自分の好きな様であればいいと思っている。他の人は他の人、私に迷惑がからなければいいと思っている。でもそれではあの子たちは何も変わらない。モンローさんはあの子達を優しい人しようとして頑張っていたから、私が許せなかったのかもしれない」

「・・・おっとうが熱を投げるときはある？」

「そうだな…自分に熱を投げられて、私がそれに我慢できないとき、かな」

メイはそれからまたしばらく黙った。

「その時おっとうは何のために熱を投げるの？」

何のために。私はメイを見た。私に今までそんな質問をした人はいない。私は話を自分から逃すのを今までごく自然に、呼吸をするように行ってきた。子供はある意味論理的だ。ただまっすぐにその無垢な眼で疑問を突き詰めていく。私は返す言葉につまった。暗い空を見た。会話で不意をつかれたのなど、何年振りだろうか。それとも、私はメイに心を許しているのだろうか。メイにすがろうとしているのだろうか。暗い空は不自然に明るく、星は薄く、安っぽく見えた。

「やっぱり、…ぬくもりのためなのかもしれないなあ」

「モンローさんが怒ったのは、私が臆病だから。私が熱を投げないのは嫌われるのを怖がっているから。でも、本当に暖かいぬくもりを得ようとするのなら、たまには熱をぶつけあっても、お互いを知るべきなのかもしれない。ぶつけあって、お互いの底を見せあうべきかもしれないな。底の様子を」

潰されたメイの右手の感触に気付き、私は慌てて自分から離れた。手に力がいっていた。「あ、すまない」

メイは私の左手を強く、だがやはり子供の力で握った。「大丈夫」メイの手が涼しく、私の頭を静かに冷やしてくれた。私は微笑み、柔らかくメイの右手を握り直し、二人で、のんびりと涼しく夜道を進んだ。

「熱をぶつけあわないと、お互い知りあえないの…」メイがそんなことを呟いた。

「これいらない？」濃青色の布切れを右手でかかげ、メイがそう聞いてきた。「ああ。欲しいならどうぞ」風呂から上がり、ミネラルウォーターを冷蔵庫から取りだした私はそう答えた。

「ありがとう」そう言ってメイは寝室へとバタバタ入り、ドアを閉めた。

むかし自作でシャツをこしらえたとき使った布生地之余りだ。夜

中の人外な海を象徴するような、沈んだ青が気に入り、残った切れ端も鍋掴みの代用として台所に干して置いたのだ。使ってはいないが。

何に使うのだろう。グラス一杯の冷たい水を飲み、台所で一服しながら作ったシャツの行方を暇に考えた。

しばらくしてメイが出てきた。今日の昼も着ていたメイ唯一私物の消炭色の麻着物を着ていた。少し背後に回した両腕の袖が両手が隠れるほど長くなっている。濃青色の袖がメイの手首から先に付け縫われていた。両腕を前に出せば、うらめしやー、と呟く権利が得られそうだった。

「どうしたんだ」私は椅子から立ち上がり、好奇心で眼を袖に向けた。

「ん、ちょっと」メイは何でもなさそうにそう言って、私の横をすり抜け台所に向かった。愛用の湯飲みをテーブルに置き、冷蔵庫から麦茶のデキャンタを取りだし、注ぎ、デキャンタを冷蔵庫に戻して、冷蔵庫を閉めた。両手を使わず行った一連の作業は私に違和感を与えた。

「左手、怪我でもしたか」私の向かいに座り、やはり右手で麦茶を飲むメイに聞いた。

「ううん。ちょっと疲れただけ」そう言うメイの表情は、まるで悪戯を見つけたような顔に見えた。

「ちよつと左手見せて」メイの表情が色を失った。

私は何か酷いことを言ってしまったか。メイの顔が哀しいものとなり、そして私の胸に小さく寒気が走った。何回も見ただ暗い顔と違う。辿りついたメイの表情は、この世への何らかの姿勢も伺えないものになっていた。疲れた、確かにそう述べられれば遺言として納得できそうだった。

固まった視界で、メイの左腕がテーブルの上にあがった。

私に向けられた濃青色の袖先は垂直に垂れてメイの左手に被さっていた。私は自分の左手を伸ばし、メイの左手を握った。濃青色の

絹は潰れることなく、私の手に細い腕の感触を与えた。

私は両手でメイの左袖をまくった。

見えたのは円形の海の泡のような色の、腕の断面だった。左手がない。

私の口から疑問の言葉がかすれて細切れとなって出た。

「左手は・・・」やっと形にできた言葉も疑問だった。

私の両手に掴まれたメイの左腕に力が入った。「あ、すまない」メイは口を薄く微笑ませ、私が両手を離すと逃れるように左腕を引いてテーブルの下にやった。「熱がってたら、消えちゃった」

消えるわけがないだろう。でも、医学の出番はなさそうだった。釣りとは三途の川くらい、進歩著しい科学とは違う属性に見えた。

「いつ」私は質問を繰り返した。

「さつき。もんろーさんが怒鳴ったとき」

「直らないのか」

「分かんない」私は馬鹿なことを聞いた自分が情けなくなった。当の本人が一番不安だ。不安をぶつけてもらおう保護者のはずが、真逆だった。

「大丈夫。別にわたしは生きてるし」仮にも自分の子供に、六歳で生きていることに喜びを見出すようになって欲しくはなかった。

「左手だけか？」

「うん」

「痛くは無いのか」

「うん、いたくない」

「熱に当らなければいいんだな」

「うん。たぶん」

「じゃあ。TVでも見よう」私は立ちあがりTVの前のソファーに向かった。

「うん」メイはそう答え私の隣に座った。

私はメイを持ち上げ、自分の膝の上にのつけた。メイが、あ、と呟き、少し座り加減に困ったような様子を見せた。私が体に腕を回

すと、メイはおとなしく私の体に背中を預けた。

「暑くないか」

「少し。でも心地いい」メイが私の腕に右手を当て、頭を私の胸に寄りかからせた。手の僅かな震えが悟られないか、少し心配だった。

「おっとう」そしてメイが呟いた。

「うん」

「わたしは普通じゃない？」

「いいや。普通の、いや、私にとっては特別な普通の女の子だ」
「なにそれ」メイが少し笑った。

両手の中の体は小さく脆く、でも私にとって暖かな確かさだった。これから私は、どうしようか。少し考えた。

L e n u m e r o 5 (前書き)

ヤシの木の下にいた。私が真ん中。右手にメイ。左手に白い女。三人並んで歩いていた。

少し、出掛けてくるね。

メイがそう言って鍵を開け出て行った。

私と白い女は部屋で愛し合った。

Le n u m e r o 5

ふと目が覚めた。隣を見るとメイがいなかった。メイの携帯に電話を掛けた。出なかった。私はパソコンのスイッチを押し、換気扇に向かい、煙草に火をつけた。パソコンが起動すると、私はメイの居場所の地図を印刷した。迷子サーチの機能が付いた携帯にしておいてよかった。

駅を越えるのか。結構離れた場所だった。私は厚手のシャツを羽織り、外へ出た。

十分ほど走って駅の周辺に着き、私はメイの居場所を携帯で確認した。家で印刷した地図の示す居場所から移動していなかった。

さらに五分ほどかけて辿りついたその場所は住宅街の中の一軒だった。暗い道に三・四人ほどの人ばかりが確認できた。高校性ぐらの男が二人。同じ年頃の女の子が一人。あと小学生ぐらの子が一人いた。近くには大きな梯子が倒れていた。

私は走って近寄り、「ちょっとすいません」とその中心を覗いた。「モンローさん」頭に血を流して倒れるモンローさんがいた。返事はしなかった。

「何があったんですか」私は近くの高校生ぐらの男に声をかけた。

「あんた、こいつと知りあいなのか」その黒坊主の男の声は震えていた。

「一回話したことがある」私はそう答えた。泣き顔の小学生がこのあいだモンローさんが叱った眼鏡の少年だと気付いた。「救急車はもう呼んだんですか」私が聞くと女の子が首を振った。私は携帯を取り、一一九を押した。

「違うんだよ」もう一人のアフロの男が、しがみついて来る勢いで言った。

「この子の部屋に侵入してきたんだよ」顎で眼鏡の少年を指し、アフロの男は続けた。

「幽霊が出た、ってこの子が部屋に泣いてきたから、こいつの兄貴と一緒にこの子の部屋に行ったんだよ」指で黒坊主を指した。眼鏡の兄が黒坊主で、他の二人はその友達のようなのだ。

「したら窓が開いててさ、この子は閉めて寝たっていうんだ。その二階だよ」そういつて後ろの家を指した。

「んで、物が勝手に落ちて、この子が、犬の呪いだ、って言うんだよ。気味が悪くなって電氣をつけたんだ。そしたら部屋一面に犬の足跡が着いてたんだ。全部こいつの仕業だぜ!？」そういつてまだむさんを責めるように指差した。

「それで窓にこいつを見つけて聡史が捕まえようとしたんだ」黒坊主のことだろう。「こいつわざわざ梯子まで用意して二階の窓に張り付いてやがった。呪うぞーなんて言いやがって。そしたら梯子が倒れた。悪いのはこいつだ。不法侵入だよ。狂ってやがる」

お前もバット振りまわしただろ、黒坊主、聡史が呟いた。「なんだと」アフロが聡史に掴みかかった。やめてよー、と女が声をあげた。

救急車を呼んだ。「何すんだよ!」怒鳴ったアフロを無視して、眼鏡の小学生に聞いた。「私の娘…小さな和服の女の子がいなかったか?」

眼鏡の子が頷いた。

「中年の男に連れていかれたよ」女の子がそう答えた。

「どこに」私は女の子に聞いた。

「私たちが、家から出てこのお爺さんが血を流して倒れてて、どうしたらいいか絶句してたら、和服の女の子が、大丈夫?ってお爺さんに走り寄って、なんか…話したあと、シャツに黒い蝶ネクタイのおじさんが通るかかって、お前が…とかなんとか言って、こっち来い、って手引っ張って連れていっちゃった」

「どこに」ともう一度聞くと「分かんない」と女の子は首を振っ

た。学校の内申取り消されたらどうしよう、女の子がうずくまった。私は携帯を取りだし、メイの居場所を調べた。Receiving page：の表示が長い間消えず、そして居場所が出た。

あの喫茶店だった。

「ちよつと待て」

走りだそうとした私の背後で、モンローさんの声がした。

モンローさんを取り巻いていた少年達が一步、後ずさった。そうして見えたモンローさんはさっきと同じく地面で仰向けにぐったりとしており、目も閉じたままだった。

「場所は分かっているんだろう。一言聞いて行け。メイさんに関することだ」口だけが動き、発せられた声は掠れていながらも威厳をきかせた声だった。

私はモンローさんに歩み寄り「なんですか」とひざまづいて聞いた。

「メイさんが来た。多分さっきだ。真夜中に入り始めた頃だろう。ワシが、こんな時間に危ないだろう、と言うよりも早くメイさんは、ね、モンローさん、と私に質問した。人とずっと一緒にいるには熱をぶつけ合わないといけないの、とね」

私の胸に、針のような小さな衝撃が刺された。

「ワシが、それを感情をぶつけあうことだと解釈するには、少し時間がかかった。それで、ワシはそうだ、といった。人間苦勞なしで愛を得ることはできない、とな。愛について軽く説明もさせられたがな。そしてここに連れてきた」

私は白くなった頭で立ちあがり、駆けだした。「おまえも、時には汚くても無様でも戦え。逃げるな」去る私の背中にモンローさんは弱った叫び声をぶつけた。

そんなに、単純じゃない。

私は走った。

しばらくして忙しいサイレン音が耳に入り、赤い光が視界をかすめた。

喫茶店タナカは、当然といえば当然だが閉店していた。小さなガラスの壁から見える店内は真っ暗で静まりかえっていた。当然誰も見えない。

私は携帯を取りだし再度、メイの居場所を確認した。サーチ中の表示が消えない画面を見ていると、ドアを開ける音がした。目を向けると女の人が喫茶のドアの中へ入っていくのが見えた。私服だが、あの女の店員だった。

私は閉まったドアに走り寄り、静かにノブを下げた。ドアはゆっくりと開いた。だが、途中で固い手応えが僅かな隙間以上開くことを拒否した。

チェーンロックがかかっていた。なぜ鍵をかけないんだろうか。隙間から中を覗くと「店長、こんな夜中に何の用ですか」少し寝惚けたような声が聞こえた。

しばらくの間の後、店長の声がした。「こんな遅くにすまない。だがそれだけの用事がある」

そしてまた一間があり店長は語り始めた。「君は最近ずっと機嫌が悪かった」それは・・・と何かを言おうとした女店員の声が聞こえ、黙った。

携帯の画面がメイの居場所が現在、この店であることを表示した。「分かってる。それは私が、あの客を、警察に通報したからだろ？それでも後日また店に来てくれて、しかもあの子を預かった御礼まで言ってくれた彼に、私が謝りもしなかったからと言いたいんだらう」

ちよつと違う、女店員の、もう覚醒した声がそう呟かれたと思う。「でもあれはおかしい。挙動もよそよそしかったし、母親も見ない、なにより親子で敬語を使うのがおかしい。誘拐がそれほど珍しい時代でもあるまい。私は正しかった」

しばしの沈黙。「いや、そんなことが言いたいんじゃない。でも私は今日謝ろうとした。君のために」店長の個人的な感情のた

めに、他の関係者を入れないためのチェーンロックだとわかった。

「さつき店を閉めた帰りにあの子を見つけたんだ。あの子はホームレスと一緒にどっかに移動しているところだった。ホームレスは大きな梯子と大きな袋を持っていた。私は後を追いかけた。この時から変だと思っていた。こんな夜中に、ホームレスと一緒に、大きな荷物を持って、何をしにいくんだ？ 怪しい、と」店長は続けた。

「それで移動が終わったと思ったら、あろうことか、どっかの家に梯子をかけて爺さんが二階の窓に登り始めた。通報しようと思っただが止めた。また間違いだったら阿呆だからね」不快に思う皮肉だった。

「爺さんが降りてくるのには時間がかかりそうだと思い、私はその子に近づいた。色々聞くつもりだった。親が心配してるだろうと思っただよ。その途端梯子が倒れた。爺さんも一緒に地面に落ちてきた。梯子の下敷きになってね。その子が梯子を持ち上げようとした。右手だけで梯子を掴み、左手は梯子の下に入れて腕で持ち上げようとする、なんだか不自然な動きだった。私も梯子をどけようと近くに寄った」

冷たい焦りが私にこみ上げた。

「びっくりしたよ。左手が無いんだ。ただ無いんじゃないぞ。見てみろ」

「え」

女店員の、驚嘆の一声が発せられた。

興奮を抑え込む声で店長が言った。「おかしいのはこの娘の方だったんだよ」

勝ち誇るような店長の囁く低い声が静かに響いた。そしてその音の尻尾に被さるように、あ、という小さな声を耳が捉えた。メイだ。私は脇を締めドアノブを掴んだ右手を一息に引いた。金属の荒い音と共にドアが開いた。私はそのままうす暗い店内へと走り入った。そして止まることなく、放心しているメイを右目に捉え、メイに熱

を当てつづけたであろう店長に向かって、一秒でも早く足を向かわせた。

「なんですか」迫っていく視界の中で、店長は顔を張りつめ、メイを掴んだ手を離れた。私は立ちすくむ店長の一歩手前で強く左足を踏み出しブレーキをかけた、勢い余った力を右半身から回し、右足を捻り、腰を捻り、肩を入れて、一直線に、ただ見据え続けた店長の、腹に突きを差し込んだ。

店長がうずくまった。

そして店員が思いだしたように私に駆け寄り「やめて下さい！」と言った。

私はメイを思いだし、横でしゃがみ込むメイに駆け寄った。「大丈夫かメイ」そう言って肩に触れると、メイが一瞬顔を歪め「アツ……」と言った。あ……。私は手を離れた。そして興奮の余韻が残る足取りで店のコップを借りカルキの効いた水道水を一杯飲んだ。そうしたらメイを両手で持ち抱え、「ごめんなさい」と深くお辞儀をしてから店を出た。

店から離れ、人通りのなさそうな道を進み、街灯も当たらない暗がりにメイを下ろした。

「大丈夫か」

「うん。ちょっと驚いたけど……」眼の下に濃く影ができています。

「ちょっと待ってろ」少し息の荒いメイに冷たい飲み物を飲ませようと私は自動販売機を探そうと立ち上がった。

「あ、待って」振り向くとメイが右手を伸ばし、私の移動を拒んでいた。私はメイの隣に腰かけた。

「ちょっと、一人は怖い」メイはそう言ってうつむき、両手で私の体にやんわりとしがみついた。そしてメイは小さく溜息をついた。右手もないのに今気付いたのだろうか。それはきつと何か物足りなくて、そしてメイを哀しくさせてしまうだろう。先ほど伸ばされた右腕の先に見えた泡白い断面。無くなってしまったメイの両手。あの野郎。

私の腹に赤い塊が煮え、沸きあがってきた。

「だめ」メイがそう言って腕の力を強めた。

私は真赤に染まった自分の思考に気付き、メイを見た。「ごめん」とすると私のうつむけた頭にメイの腕が触れ、涼しい吐息がかけられた。

私は両目を閉じ、傾けた頭をメイに預けた。音もなく白いそよ風が頭の中央を吹き抜けた。それは血液をささやかに巡り、私の体を内からひんやりと優しく撫でた。頭に添えられた腕を両手でそっと包んだ。私は薄暗く涼しい消炭色の意識の中でただメイの感蝕にすがった。これが、私が人に頼らず生きてきた代償なのだろうか。信仰にも似た強く執着する場所だった。メイに守られていた、そう感じた。この瞬間、メイが私の意識に大きくその姿影を刻んだ。

そして同時に強い不安が沸き起こり私は顔をあげ、メイの両腕をゆっくりと掴み、聞いた。

「メイ、君は、どうすれば無事でいられる？」

私から視線をそらすようにメイはうつむいた。

「普通の子と違うの？」私は返す言葉に詰まった。いや、とだけ私の口から出た音が暗い沈黙を漂い薄れて消えた。

「・・・公園の湖」メイの言葉が聞こえた。

「おっとうはあれに似てる」

「どういうこと・・・」

「霧の奥にありそうな、ひっそりとある、小さな波さえ立たない静かな湖。おっかあと同じでまるで浸かるようにただ静かでいれる場所。でも、おっかあよりは少し熱があった。でもそれはちよっと暑いのに、なんかずっとそこにいたい、私が色鮮やかになるような、素敵な気持ちになった。まだむさんはしっかりと大きなの、店員さんは小さくて深い、店長さんはまあまあ広くて浅いの。みんなひっそりとはしてなかったけど、それぞれに湖を持っていて、私はそれを見て面白かったし、それぞれに楽しませてもらったの。でも突然、熱い丸っこい塊が飛んできた。初めて気付いたのはデパートに

行くとき、周囲で飛び交った。その時はちっちゃい虫が少し熱くて飛んでるな、ぐらいにしか思ってた。でも、まだむさんや店員さんや店長さんの熱の玉がほっぺに当たったりして分かったの。みんなが投げるって。でも何で投げるのかわからなかった。最初は怖かった。でも、それが、あのヌクモリを手に入れるためだと、教わったでしょ。でも私は熱を投げたり、受けたりしなくても、おっとうのヌクモリに浸かることができた。でも、段々、心配になってきたの。なくなってしまうのになって、まぼろしなのになって。元々、あつくて気持ちいいなんて私はおかしいなって思ってたの。その内、私の奥に小さな灯りみたいな玉ができてたのに気付いた。綺麗だけど、ろうそくみたいに、その光に気付くと熱くて、まぶしくて、胸が勝手に熱を持って、それを手放したくない自分も怖かった。だって私の体には、熱すぎたから」熱すぎたから。抑え込むようなメイの声が、抑え込まれたように途切れ、再び無音が広がった。そこに、コン。と石にぶつかる軽い音がした。

私は地面に落ちた下駄を見つけ、両手でそれを拾い、いとおしんでメイの足に当てた。でも履かせることはできなかった。

もう、両足もなくなっていた。涼しい空気の感触だけが私の手に触れた。

メイが私に顔を向けた。「小森公園に行きたいんだけど、もう歩けないの」

眉の落ちた、口を一字に結んだ、メイの微笑が見えた。

「私がいるじゃないか」胸が絞られそうな感覚を踏み締めるように、私はメイを両手で抱えて立ちあがった。でも熱を当てないように、と心に言い聞かせ、私は公園へと歩き出した。

0時を過ぎた小森公園はやはり、日中への無関心さを意識させるほどの静寂と、酔うほどの身を切る冷たい風が吹いていた。

私は湖を囲う木の一つを背にメイを膝に抱えたまま腰を下ろした。

「メイ、小湖に着いたよ」

私の腕の中で目を瞑るメイは、言われなくても、と言うように口

をやわらかく微笑ませていた。

膝の上にかかるメイの重さは、まるで、中に空洞が空いてしまったかのように、軽く、人にしては頼りないものになっていた。

「おっとう」 気力のようなものの消えてしまったメイの顔はロウソクのように白く、その口が動くのを見て、私は僅かな驚く感情を胸に浮かべてから答えた。

「ん、なんだ」

「おっとうの懷はこの湖によく似てる、けど奥の方、じーと眼をこらすとピンク色の火みたいなのがゆらゆら揺れているのが見えるの。私が見えびを見て、おっとうが一人でコーヒーを飲んでるときなんかに見えたんだけど、それはなんなの？」

「火？ピンク色の」 火、ということは情熱や衝動のたぐいなのだろうか。ピンク色とは、何をさすのだろうか。

そんなものは見たことがないので、私は答えに困った。だがメイの疑問に答えたかった。「私は・・・私には叶えたい夢がある。そのために自分を、高めることをただ目指してきた。自分の生活に余計な制約や面倒な干渉がないよう、人との接触も必要最低限に留め、人に頼らず生きてきたつもりだ。そうしているうちに、夢を叶えることが私にとっての全てになった。決して他の人に語らず、ただ自分の奥底で夢への自分を鍛えてきた」 そう言って、私は一つ小さく息をした。私は自分のことを話した。

これが答えになるのかは分からない、が、現在の私の生活のかたち、私の人間性を形づくっている、根底にあるのは、間違いなく夢への孤独な執着、であった。

だけど、と私は再度口を開いた。「孤独な過程を経て、手に入れる夢の先にはやっぱりぬくもりがあるよ。その瞬間、メイにも隣にいて欲しい、と私は思っている」 喋ることによって辿りついた一つの望みは、メイが私の成功を隣で笑って、一緒にその瞬間を分かち合ってくれることだった。それは夢への原動力の一種となりうるものである。一緒に手をつないで、幸せを共有して・・・。

「メイ、なんで・・・君はどんどん軽くなっていく」胸を擦るように言葉を呟き出した。

メイが苦しそうな吐息を口から出した。

「何故だ。もう、君を苦しませる熱は、此処にはない。熱をぶつけあう必要性など・・・それが今までの私達の生活が証明してくれる。・・・短いけど、私にはそれが幸せだった。満たされ、居心地が最良で、成長していけるなんて・・・これ以上のことはないんだ。熱をぶつける奴のいない生活はできる。苦しまなくていい筈なんだ・・・」そう言って私は気付いた。

「私か・・・。私も、熱を出しているのか・・・？」執着、努力を強いる要求。それは・・・熱か？怒鳴らなかったとしても、それが私にとっては、善意からだとしても、メイにとっては、身を削る悪意か？

それと同時に、私が外界との接触のない生活を提案したことに付き、自分の言葉に恐怖を感じた。

メイを抱える自分の両手、私は汗の滲むそれを、呪いのように見た。「ちがう・・・」メイが眼を開けることなく呟いた。

「わたしも、多分持ってしまったの。おっとうと繋いだ手、あのヌクモリがそのまま私の奥に小さく灯りになったの。熱なのに、逃がしたくなかった。でも、熱をぶつけあうのはやっぱり、わたしにはできなかった。わたしはわがままになっちゃって、それが灯りを熱く、わたしを、じぶんを消していつてるの」

「そんな・・・」掠れた息が喉から出た。

私にとって嬉しい想いがメイには、命取りだった。でも・・・それは・・・人を好きになるとき、恋をしたとき、人の誰もが、持つ感情じゃないのか。それじゃあ・・・メイは・・・。

熱が私を支配した。身に染み付いたと思っていた冷静さも、他人を欲する気持ちでいとも簡単に、赤銅色の熱源に変わった。答えが見えない。一步も進めない。何を正しいとすればいいのか。暑さで踊る頭の中、私はどう対処すればいいのか分からなかった。モンロ

「さんの言う通り、私は無力だった。

額の一点が醒めた。小さく冷たい感触。私は眼を開けた。

メイは既に顔を離し、少し照れて、穏やかに私を見つめていた。

「キスしちゃった」

顔を浮かすのにさえ、疲れてしまったのかメイは少し途切れる声でそう言った。

こんなに小さい存在が……。晴れた頭が、背筋の震えた感触と同時に、そう考えた。こんな小さなメイの気持ちちが光明のように私に道を照らしてくれた。私は、メイを微笑えませる存在でありたい。私は躊躇った。

「大丈夫・・・お願い」メイが頼んできた。

私はメイの体を少し持ち上げ、その額に、精一杯の想いを込めて浅く口付けをした。なんともないメイの額にほっとすると、メイは、本当に嬉しそうに、一杯に微笑んだ。「ありがとう」

私の胸が何らかの素早い衝動で満たされ、そしてその想いが冷えて重く潰されそうに苦しくなった。

「メイ・・・どうせ、熱いなら、全部言うんだ。今の気持ちを私に聞かせてくれ。君の熱は、僕を溶かさないんだから」

驚きを持った大きな目で見つめるメイに、私は精一杯微笑んだ。

するとメイは手のない腕で私にしがみついた。私も抱きしめ返した。

メイの体が少し震えた。私はなだめるように頭を撫でた。「ただ、言ってくればいい。思ったことをそのまま」

発せられる嗚咽のような小さな声が何かの言葉を成してきた。「怖い・・・本当はしょうがない、って分かっているのに。怖い、すごく怖いの。消えてしまうのが。もっと一緒に、おっとうと一緒にいたかったよ」始めて聞く、高まったメイの声、叫びが、嬉しく、果てしなく悲しく悔しく鋭く胸に響き渡った。「うん。私もだ」私は静かにメイを両手で包み続けた。ヌクモリでいられるように、消えないように。「ずっと一緒だ」

メイが顔を上げた。「ずっと、一緒？」

「うん。メイは消えないよ。例え、離れたとしても、絶対に再会してみせる」

しばらくの沈黙のあと、「うん・・・」とメイが呟いた。

私は自分の体の熱に気付き、慌てて距離をつくった。「熱くないか」

するとメイは四肢のない体をこっちに倒し「うん。大丈夫。本当は暑いんだけど、すごく、幸せ」と言った。

「そうか。なら良かった」私はメイを包みなおし、頭を撫でた。

「これ・・・なんていえないんだろ。ヌクモリって熱いけど、いつまでも、ここにいたい」

希薄になるメイの感触に私は震える喉で言った。「暖かい。そう言うんだ」

メイが微笑んだ。「おっとうって暖かい」そう言うと、肩にもたれているメイの頭が軽くなり、その手応えが、勢いの強い水に触っているような、確かに在るが、脆い、というものになった。

「メイ」メイを顔の前に持ち上げると、額の一点、口付けた場所から湖が見えた。透明になっていた。そして、メイの体が私の手を滑り、私のほうに倒れ、体を通り抜けて地面に向けて落下した。抱き起こそうと伸ばした手が空をきった。

そして突然、霧が視界の一面を覆った。「メイ！」私は両手を振り伸ばし、メイの感触を探した。「止めろ」まるで、こっちがすごい速さで疾走しているように、勢い強い霧が辺り一面を舞い、私を混乱させた。

「メイ」私はメイを搜した。

そして霧が晴れると、いつもの小湖の風景が戻った。さっきまでいた木の根元に、メイはいなかった。

「メイ？」

口に出してもメイの姿は跡形もなく、ただ静けさとほろ寒さが私を暗く包んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0701a/>

遠野より麦の霧雨

2010年10月9日19時56分発行